

## VII 帆立貝古墳論(下)―帆立貝古墳の被葬者―

### 1. 帆立貝古墳の墳形名

#### 1) 「墳形」の語義

「墳形」の語は重要な考古学用語であるにもかかわらず、どの考古学辞典を見ても項目として取りあげられていない。そのためもあってか、「前方後円墳の墳形は時代によって変化する」といった用例のように、個々の古墳の形態的特徴を示す語として用いられることがある。

しかしこれは誤用で、「墳形」の語は、前方後円墳、円墳、方墳などの「墳丘形式」を指す言葉として用いなければならない。西嶋定生（西嶋 1964 : P215）が「定式化された墳形」は「国家的身分制の表現」と説明して以後、墳形と墳丘規模が、被葬者の身分ないし倭王権における政治的位置づけを示しているであろうことも一般に承認された理解といえる。

現在一般に認められている墳形名を整理すると次のようになる。

①単純図形墳 円墳、方墳、長方墳\*、八角墳

②複合図形墳（水平的複合）

前方後円墳、前方後方墳、中円双方墳、双円墳

帆立貝式（形）古墳

③複合図形墳（垂直的複合）

上円下方墳、八角下方墳\*

（\*印のあるものは独立した墳形として一般に承認されたものとはいえないかもしれない<sup>1)</sup>。

墳形名の命名法には一定の約束があって、単純図形墳の場合は「(幾何学的) 図形名+墳」、複合図形墳の場合はこれに加えて前、後、上、下、中、双という、複数の図形の接合状況を説明する文字が挿入される。図形名からは「形」の字は省略され、古墳の「古」の字も省略するのが原則として慣例化している。したがって、時折みかける「方形墳」や「八角形古墳」のような呼称は原則からはずれたものといえる。

これらの墳形名にくらべ帆立貝式（形）古墳という命名法はまったく異質であり、幾何学的図形名によらず、帆立貝という自然界に存在する事物との形態上の類似から名づけられている。

今回の検討によって、漠然とした意味合いの帆立貝式古墳の中から、突出部の長さを基準として造出付円墳を分離した。造出付円墳の墳形はあくまで円墳である。長さ10単位以上の前方部をもつ古墳の墳形は、すべて前方後円墳として何ら支障ない。

残されたのが帆立貝古墳（狭義の帆立貝式古墳）の扱いで、長さ4単位から9単位までの小方部をもつ古墳について、これを独立した墳形と認めるか、その場合「墳形名」をどうするかが大きな問題となる。

#### 2) 独立した墳形としての帆立貝古墳

従来、帆立貝古墳は前方後円墳の一変異形であるとする見方で一致していた。近年の論著からひろってみても、小野山節（小野山 1970 : P73）は、帆立貝古墳を大王権力によって前方部を極度に制限された前方後円墳と捉え、都出比呂志は、「帆立貝式古墳とは前方後円墳の前方部が極端に短いものをさす言葉」（都出 1992 : P28）と明確に規定している。

石部ら4氏は、前方部長1区型から4区型までを帆立貝形古墳と規定した上で、「前方後円墳の前方部の

基準規格には、1 区型から 8 区型までの 8 類型がある」（石部ほか 1980 : P99）として、前方後円墳の範疇に含まれる古墳であるという見方を示した。

遊佐和敏、櫃本誠一の両氏は、ともに「帆立貝式（形）前方後円墳」という用語を用いていることから明らかなように、造出付円墳をのぞいた帆立貝式古墳を前方後円墳の一種とみなしている。

このような見方に対し小澤一雅は、「デザインとして墳形全体を大観したとき、定型化された前方後円墳とは異質とみるべき」（小澤 1988 : P58-59）として、帆立貝式古墳をコンピュータによる前方後円墳の形態研究の対象から除外している。自身の区分基準を示した上での判断ではなく、あくまで大観にもとづく所見であるが、全体の論旨には聞くべき点が多い。

筆者も、帆立貝古墳は前方後円墳の範疇に属さない、独立した墳形と捉えるべきものとする。前節まで詳しく見てきたように、長さ 9 単位以下の小方部をもつ墳丘プランには、前方後円墳とは明らかに異なる構成原理が認められる。小方部は、長さ、幅、高さとも「前方部」にくらべ小さく抑制され、倭王権における被葬者の地位、格づけが一目瞭然、視覚的に了解されるよう措置されているといつて過言ではない。

### 3) 新しい墳形名の提案

それでは、帆立貝古墳を独立した墳形として認めるとき、その墳形名はどのように名づけるのが適当であろうか。遊佐、櫃本両氏が使用する「帆立貝式（形）前方後円墳」という名称は、前方後円墳の一変異形であるとの前提に立った名称で、適当な命名ではない。また、既存の墳形名は 5 文字まででおさまっているが、両氏の命名は 9 文字を要し冗長にすぎる。

独立した墳形としての狭義の帆立貝式古墳について、その適正な墳形名をどのようにすべきかと考えるとき、「帆立貝」の語をなお使い続けるかどうかという点が第一に問題となる。

結論としては、他の墳形名の命名原則にならって、図形名を基調とする名称にするのが適当と考える。「帆立貝」の語を使った名称も、即物的で一般にもわかりやすく捨てがたいが、帆立貝を含む呼称には、どうしても前方後円墳の一種とみる認識にもとづいて命名されたものという印象がつきまとう。類似の表現として「柄鏡式（形）古墳」という呼称があるが、これは独立した墳形を指すものではなく、明らかに前方部の細長い前方後円墳を指しており、学史的にみれば「帆立貝式古墳」はこれと対になる命名である。前方後円墳ではない、独自の墳形である小方部をもつ古墳の墳形名として、帆立貝の語を用いるのはやはり適当とはいえない。

また、滋賀県天乞山古墳や三重県明合古墳のように、同じく小方部をもちながら主丘部が方形の墳形には、帆立貝のついた名称は適用できない。これらを独自の墳形と認めるとすれば、その墳形名として、「帆立貝」に対応して、その平面プランに似た形の事物を探して「〇〇式」「〇〇形」と新たに命名する必要があるが、適当な事物があったとしても、その名称を定着させるのも容易なことではなさそうである。したがって、小方部をもつ円丘系、方丘系の 2 つの墳形に通用できる命名に配慮する必要がある。

### 4) 既往の墳形名への疑問

都出比呂志はよく、前方後円墳、前方後方墳をそれぞれ「後円墳」、「後方墳」と略記する（都出 1992 など）。しかし同じ省略するなら、江戸時代の宮車模倣説にもとづく前・後の字こそ取り去るべきで、「方円墳」、「方方墳」とした方がよい。

ただこの場合、方方墳という省略名は口に出しているときにかなり違和感がある。双円墳という墳形名があるのだから「双方墳」とする手はあろう。前方後円墳のような命名原則にしたがえば、双円墳は前円後円墳でなければならない。用語の簡素化を是とし、双円墳という呼称を認めるなら、前方後方墳は双方墳とすればよい。現状のほかの墳形名（帆立貝式以外の）も首尾一貫したものではないことを認識すべきで

あろう。

既往の墳形名について、統一した命名原則にもとづいて修正すべき余地はあると考えるが、各名称ともすっかり定着しており、すべての墳形名の改正をここで提起しようとするものではない。ここでは、現状の墳形名にこのような修正の余地があることを承知した上で、帆立貝古墳の適正な墳形名について考えてみたい。

水平的複合図形をもつ墳形としては、慣例にならって前方後円墳や双方中円墳のような説明的名称をつけるのが最も適切であろう。前方後円墳の命名法にしたがえば「前小方（部）後円墳」となるが、先述のとおり前・後という説明字句はもはや必要なかろう。そこで前・後の字を取り去ると「小方（部）円墳」となり、「部」の字も取ると「小方円墳」となる（語の区切りは、いうまでもなく小/方円墳ではなく小方/円墳である）。小方部をもつ円丘系の墳形をこのように呼ぶのは、他の墳形名ともつり合いがとれているといえよう<sup>2)</sup>。

主丘部が方丘の場合は「小方方墳」となる。ただ、この名称は新造語の常で語呂が悪く感じられる。「部」の字を取り去らず、「小方部円墳」、「小方部方墳」とすれば幾分なじみやすいかもしれないが、やはり違和感はぬぐえない。

#### 5) 小方部墳という呼称

小方部をもつ墳形として円丘系、方丘系の2者があることは否定できない事実である。両者を一括して「小方部墳」と総称するのも一案であろう。ただし、2種の小方部墳のうち、円丘系は数百基という多数の存在が知られるのに対し、方丘系の確認数は今のところ十指に満たない程度であり、墳形としては特殊、僅少な存在といえる。

そこで、本書では「小方部墳」の語を、2種の小方部墳のうち圧倒的多数を占める円丘系の小方部墳を指し示す墳形名として使用することとしたい。音読した場合も筆者にはあまり違和感がなく、こちらの方が狭義の帆立貝式古墳の呼称としては実際的かもしれない。方丘系の小方部墳にかぎって指し示す場合は当面「小方部墳（方）」としておきたい。

ただ、一個人の提案になる「小方部」を基調とする墳形名が速やかに承認され慣用化されるとも思われず、帆立貝のつく名称が根強く使われ続けるのかもしれない。その場合は、式か形かというあまり意味のない議論を避けるためにも、本書でこれまでそうしてきたように、何もつけず単に「帆立貝古墳」としてはどうかと思う。字数も他の墳形名の上限（5字）内におさまっており、つりあいがとれる。

従来の「帆立貝式（形）古墳」の語は、正式な墳形名としてではなく、円墳状の主丘部に短小な突出部をもつ古墳という程度の意味合いをもつ通称として、今後も使用されることに支障はなかろう。今回の検討によって造出付円墳、小方部墳、前方後円墳の別を突出部の単位数で明確に区分することが可能となったが、墳丘の遺存度の問題や未調査などのため単位数が把握できないもの、過去に十分な調査を経ずに消滅し検証できないものなどについて、その墳丘形態上の特徴を指し示す用語としては便利に使うことができる。この場合、正式な墳形名ではないので、帆立貝式古墳でも帆立貝形古墳でも何でもよいと思われる。

以上を整理すると、

小方部墳 円形の主丘部と小方部（長さ4単位以上9単位までの突出部）とで構成される墳形。

ただし、本書の以下の記述では小方部墳（方）をも含む総称としても使用する場合がある。

小方部墳（方） 方形の主丘部と小方部とで構成される墳形

帆立貝古墳 小方部墳と同義の通称

帆立貝式（等）古墳 小方部墳の通称で、造出付円墳あるいは前方部の短い前方後円墳について、その突出部長が確定できないとき、それらを含んでいうことがあるとなろう。

なお、小方部墳（方）に関しては、小方部長の上限などが小方部墳と同じように設定され、前方後方墳と区分されていたものかどうか、今のところ検討できていない。

いうまでもなく、帆立貝式（形）古墳という慣用された用語を捨て去り、新しい墳形名を付与するというのは重大な問題であり、一個人の判断に委ねられるものではない。しかるべき学会レベルでの検討を経た上で公式化されることを期待したいが、この種の古墳の概念規定を明確化する作業の一環として、墳形名についての筆者案を示した。前方後円墳をはじめとする他の墳形名についても、これを機に総合的な再検討作業がすすめられることを願う。

なお、小方部をもつ主丘部円形と方形の2種の墳形を一括して示す用語としても「小方部墳」と呼称することが許されるなら、前方部をもつ2種の墳形、すなわち前方後円墳と前方後方墳を一括して示す場合に「前方部墳」と呼ぶのも一法であり、便利に使用することができそうである。

## 2. 小方部墳という墳形

### 1) 古墳築造の規範

これまでの検討の結果、突出部長の単位数によって、従来漠然と規定されてきた帆立貝式古墳の中から3種類の墳形を明確に分離することができた。

結論として、突出部長が24等分値3単位以下の古墳は造出付円墳、その墳形は円墳となる。同じく10単位（実質12単位…後述）以上は前方後円墳である。4単位以上9単位までが小方部墳（帆立貝古墳）となり、諸家による既往の区分基準とは異なる結論となった<sup>3)</sup>。

従来の区分基準案との対比を表VII-1に整理した。遊佐、櫃本、石部ら4氏の基準とくらべてみると、筆者の区分基準とはどの項目を取りあげても一致する部分がない。小方部墳という、形態的に微妙な領域にある古墳の平面プランを理解するためには、24等分値という、古墳の設計、施工に実際に使用された基準単位による厳密な作図作業が必要であり、そのような作業によってはじめて墳形の定義が確定されたといえてよい。

造出と小方部、小方部と前方部とは、長さだけを取りあげれば、わずか1単位の差で区分され、それぞれの帰属が決定されることが明らかになった。なぜ突出部長9単位までが小方部、その墳形は小方部墳であり、10単位以上は前方後円墳であるのか、という問いに対しては、小方部墳という墳形が倭王権によって創出、採用されたとき、そのように決められたからであるとしか答えようがない。

あとで述べるように、4世紀後半代のある時期、倭王権による造墓管理政策上の必要から、前方部墳と単

表VII-1 突出部長による墳形区分基準の比較（後円部直径に対する比率）

|      | 造出付円墳                   | 小方部墳（帆立貝古墳）           | 前方後円墳               | 備 考                     |
|------|-------------------------|-----------------------|---------------------|-------------------------|
| 遊佐和敏 | 1/2を下回る                 | 1/2を上限とすること           | 1/2以上               |                         |
| 櫃本誠一 | 1/5以下                   | 1/3以下                 | 1/3以上               |                         |
| 石部ほか | 2/8（1/4）以下 *<br>（1～2区型） | 4/8（1/2）以下<br>（3～4区型） | 5/8以上<br>（5～8区型）    | 後円部直径の8等分値<br>を基準単位とする  |
| 沼澤 豊 | 3/24（1/8）以下<br>（1～3単位）  | 9/24（3/8）以下（4～9単位）    | 10/24以上<br>（10単位以上） | 後円部直径の24等分値<br>を基準単位とする |

\*「帆立貝の名称にふさわしい古墳」という表現をとり、造出付円墳とは明言していない。  
石部らは4区型以下はすべて帆立貝形古墳とする。

純図形墳のあいだに中間的格づけの新たな墳墓形式が必要となった。その際、王権中枢からの指示にしたがって、王権内の実務官僚として造墓管理政策を担当し、専門的造墓技術者（集団）を指揮、監督する機能を有した伴造氏族（おそらくのちの土師氏）が、諮問に応じた墳墓形式を提案し、採用されるに至ったものと想像される。

突出部の長さについては、3単位区という概略設計単位の3区（9単位）が、中間的格づけの古墳（中位墳）の上限と定められたと考えるわけであるが、これは、決定の先後は定かではないものの、「造出」の長さの上限が同じ大単位の1区（3単位）以下と定められたことと関わり合う決定だったのであろう。

このようにみると、前方後円墳には前方部長10単位のものがごく少数（3基）認められたが、1基は小方部墳成立以前の古期の例（蛭子山古墳、3期）であり、もう1基は前方後円墳終焉期のしかも東国の例（長塚古墳、10期）で、古墳の築造統制がゆるんだための例外的事例といえるかもしれないものであった。11単位のものは今のところ確認されないの、12単位以上が前方部の規模としては圧倒的多数を占めることを重視すれば、3単位区の4区以上を前方後円墳とする規範が同時に定められた可能性も捨てきれない<sup>4)</sup>。

あとで見るように、その被葬者の階層差は大きかったと推定されるので、前方部墳と小方部墳との格づけ上の差異は大きなものがあつたとみられ、平面プラン上の差がわずかに1単位であつたというのも奇妙であり、実は3単位区の1区の差、24等分値では3単位の差が両者の境界として同時に設けられた可能性は十分考えられる。

いずれにしても、造出、小方部、前方部という3種の突出部のそれぞれの長さは、当時の造墓管理政策上の取り決め事項であり、その規範にしたがって、大王墳以下、中央、地方の大小豪族の墳墓が築造されていることを認めなければならない。

## 2) 小方部の機能

これまで見てきたとおり、小方部は、小方部墳（帆立貝古墳）という墳形に固有の、主丘部と密接不可分の構成要素であり、単純図形墳から形態上の区別化を図ることが、唯一最大の機能であつたとみるのが筆者の見解である。

岡山・月の輪古墳のように埋葬施設を設置するもの、群馬・塚廻り4号や同県小二子古墳（前橋市）のように多数の形象埴輪を配置するものなど、小方部に何らかの実用的機能をもたせた事例も知られるが、これらはあくまで二次的利用というべきで、小方部の本質を探る上で過大に評価すべき事象ではない。小方部は、それがあつただけで役割を果たしているのであり、小方部墳の創出に当たり、小方部にそれ以外に特定の機能をもたせようとする意図は存在しなかったと考える。

小方部は、平面規模だけでなく高さにも一定の規制を受け、主丘部中段テラス面までに抑えられ、小方部の上面は、前方後円墳の前方部のように先端に向かって高めるような加工は特にほどこされず、全体にフラットな水平面として仕上げられるのが普通であつた（排水を考慮して多少の甲盛はほどこされたであろうが）。

全体に低平な壇状の施設であるから、その上で何かを行ったり、何かを設置することは容易であり、特段の禁忌性などが意識されなければ、二次的に利用されることはありがちなことであつたといえよう。

あらゆる墳形を通じて、埋葬主体部が墳丘各所や周溝底などに追加設置されることがまれではないことをみれば、いったん指定どおりの古墳が完工し、埋葬（納棺）儀礼が終了したあとは、追葬や追善祭祀の執行などのために墳丘をどのように利用しようと、それが墳形や墳丘規格に影響するようなものでなければ、王権からの干渉を受けることはなかったものと推察される。

後述するように、造出は特別な祭祀の場として、みだりに付設することが許されていなかった可能性が

高く、そうであれば、小方部を造出の代わりとして、何らかの祭祀の場としたり、形象埴輪群像を置いて古墳を荘厳するようなことも任意に行われた。

繰り返しになるが、小方部の機能は、複合図形墳として単純図形墳より上位にある墳形であることを視覚的に明示するところに最大の眼目があり、それ以外の一律的な機能、目的は、墳形創出時には意図されていなかった。

低壇状の構造ゆえに、小方部上が様々に利用されることがあったとしても、あくまで二次的利用形態であることに留意して、小方部上の遺構、遺物の評価を行う必要があるだろう。

### 3) 小方部墳の主丘部規格

筆者は、王族をはじめ中央・地方の諸豪族の古墳は、各氏族が自らの発意で好き勝手に築造できたものではなく、原則として倭王権の一元的造墓統制のもと、王権からの造墓指定にもとづいて営まれたと考えている。

造墓指定の内容としては、造墓の可否、可であれば墳形・主丘部規格・墳長（水平的複合図形墳の場合）などは、まちがいなく王権による指定項目に入っていたことであろう。このうち主丘部規格については、全国の古墳が1単位当たり1/4歩、直径では6歩ずつ差のある限定的な規格値によって築造されていることからみて、一定の主丘部規格の序列表の中から、被葬者生前の事績や王権内におけるウヂの伝統的位置づけなどが総合的に判断されて、いずれかの値が選択され、決定されたと考えられる。

企画図によって検討した小方部墳および造出付円墳の主丘部規格を整理したのが表VII-2である。例外的な大規格をもつ宮崎県男狭穂塚古墳をのぞくと、乙女山古墳が径78歩と図抜けた大規格をもつことがわかる。円墳としては最大の埼玉県丸墓山古墳がこれと同じ規格で、造出付円墳の小盛山古墳もこれより1ランク下の大規格である。

造出付を含む円墳には径60歩以上の規格をもつものはかなり多い。これに対し小方部墳においては、乙女山をのぞくと池上古墳などの径54歩が最大規格になるようである。小方部墳として乙女山は破格の大規格をもつことがあらためて理解される。同時に、単純図形墳よりも格上と考えた小方部墳の主丘部規格が、円墳よりも総じて小さく抑えられているらしいことも認めてよいかもしれない<sup>5)</sup>。このような事実が何を意味するか、にわかに結論することはむずかしいが、墳形のちがいの意味するところを考える上で見逃せない要素であると思われる。

この表で見ると小方部長は4単位と6単位が圧倒的に多く、例外的な5単位はもとより、8単位、9単位のものも築造数はあまり多くなかったと推察されるが、それぞれの古墳の小方部長あるいは全体の墳長はどのように決定されたのであろうか。

### 4) 前方後円墳における墳長の決定

前方後円墳の場合についてみると、後円部規格の大きい順にならべて全国のベスト56基の墳長を調べたところ、大王墳級の大古墳の場合、その墳長は60進法にとって切りのよい数値か、それを基準に10歩きざみに設定されているという事実を確認している<sup>6)</sup>。

このような事実は、墳長については、後円部規格のような一定間隔の規格値の序列はあらかじめ用意されておらず、古墳ごとに1基1基、歩数によって具体的に「何歩」というように決定された可能性の高いことを物語る。当然その値は、大王の場合は治世年数や生前に獲得した権力や成し遂げた事蹟の大小、倭の五王であれば宋から除正された称号などをも総合的に判定し、政権中枢においてふさわしい墳丘規模が審議、選定され、最終的には後継大王によって決裁されたとみるのが自然であろう。

表VII-2 小方部墳, 造出付円墳の墳丘規格表

| ランク | 墳丘規格<br>(主丘部) | 小方部墳 (下欄の数字は小方部長)       |                     |                     |                   |                    | 造出付円墳                              |
|-----|---------------|-------------------------|---------------------|---------------------|-------------------|--------------------|------------------------------------|
|     |               | 4単位                     | 5単位                 | 6単位                 | 8単位               | 9単位                |                                    |
| 17  | 96歩<br>131.5m |                         |                     |                     | 男狭穂塚(宮崎)          |                    |                                    |
| 18  | 90歩<br>123.3m |                         |                     |                     |                   |                    |                                    |
| 19  | 84歩<br>115.1m |                         |                     |                     |                   |                    |                                    |
| 20  | 78歩<br>106.9m | 乙女山(奈良)                 |                     |                     |                   |                    |                                    |
| 21  | 72歩<br>98.6m  |                         |                     |                     |                   |                    | 小盛山(岡山)                            |
| 22  | 66歩<br>90.4m  |                         |                     |                     |                   |                    |                                    |
| 23  | 60歩<br>82.2m  |                         |                     |                     |                   |                    | 免鳥長山(福井)<br>宝塚2号(三重)<br>下石橋愛宕塚(栃木) |
| 24  | 54歩<br>74.0m  | 池上(奈良)<br>雷電山(埼玉)       |                     |                     | 女良塚(三重)<br>椿山(滋賀) |                    | 御塔山(大分)                            |
| 25  | 48歩<br>65.8m  | 御塚(福岡)<br>天乞山(方・滋賀)     | 野毛大塚(東京)            | 雨宮(滋賀)              | 地山(滋賀)            |                    | 公卿塚(埼玉)                            |
|     | 45歩<br>61.7m  | 月の輪(岡山)<br>明合(方・三重)     |                     |                     |                   |                    |                                    |
| 26  | 42歩<br>57.5m  | 久保田山(滋賀)                |                     | 盾塚(大阪)<br>高塚1号(三重)  |                   |                    |                                    |
| 27  | 36歩<br>49.3m  |                         |                     | 赤堀茶白山(群馬)           |                   |                    |                                    |
| 28  | 30歩<br>41.1m  | マンジュウ(兵庫)<br>久部愛宕塚(栃木)  |                     | 鞍塚(大阪)<br>御願塚(兵庫)   |                   | 井ノ奥4号(島根)          | 三吉石塚(奈良)<br>八幡山1号(広島)              |
|     | 27歩<br>37.0m  | 笹塚(兵庫)<br>高崎情報団地16号(群馬) |                     | 若宮八幡北(群馬)           | こうじ山(大阪)          | 供養塚(滋賀)<br>蕃上山(大阪) | 太秦高塚(大阪)                           |
| 29  | 24歩<br>32.9m  |                         | 樋渡(福岡)<br>磯崎東1号(茨城) | 舞台1号(群馬)<br>亀塚(東京)  |                   | 大園(大阪)             | カラネガ岳2号(京都)<br>後野円山(京都)<br>祝堂(群馬)  |
|     | 21歩<br>28.8m  |                         |                     | 神前山1号(三重)<br>小立(奈良) |                   |                    | 寛弘寺5号(大阪)                          |
| 30  | 18歩<br>24.7m  |                         |                     |                     |                   |                    |                                    |
|     | 15歩<br>20.6m  | 上大縄(広島)                 |                     |                     |                   |                    |                                    |
| 31  | 12歩<br>16.6m  |                         |                     |                     | 塚廻4号(群馬)          |                    |                                    |

墳丘規格が政治的配慮にもとづいて、後円部は一定の規格値の序列の中から、墳長は歩数によって決定されたとすると、実際の設計段階では、後円部の1単位規格に応じて前方部長の単位数を調整しなければならないことになる。指定値の範囲で適正な前方部の単位数が定まるよう、2～4単位を一区とする概略設計単位のうち、いずれか適当な大単位が選択され、周濠を含む全体設計に用いられたと考えられる。3種の概略設計単位が並存したのは、後円部規格と墳長が王権中枢によって決定され、そのような条件下で古墳の基本設計を行うための便法でもあった可能性も考えられないことではない。

前方部の高さや幅については、既述のとおり造墓指定の内容には含まれておらず、造墓主体者の注文に応じて、専門的造墓技術者が調整したものと考えられる。主体部構造などに関しても、早く西嶋定生（西嶋1964）が指摘したように、ある時期までは造墓指定の対象に入っていなかった可能性が高い。

中小規格の前方後円墳については作図作業にもとづく墳長の確定作業がすすんでいないため、同じように墳長が決定されたものかどうか今のところ何ともいえないが、大王墳級の大規格古墳に関しては、その墳長は古墳尺の歩数で具体的に何歩というように決定され、前方部の単位数は後円部規格との関係であとから調整された可能性が高い。

#### 4) 小方部墳の墳長（歩数）

小方部墳の墳長についても同様の決定法が認められるかどうか、本書で企画図を示した小方部墳の墳長を算定したところ、残念ながら大規格前方後円墳の墳長のように、60進法にとって切りのよい数値は得られなかった。

乙女山古墳が91歩で90歩の近似値となり、雨宮古墳が60歩、赤堀茶臼山古墳が45歩、狛江亀塚古墳、舞台1号墳が30歩になるほかに該当例はない。女良塚古墳、椿山古墳の墳長は72歩で、これは12進法にとって切りのよい数値だが、ほかに60進法、12進法、10進法いずれにとっても切りのよい歩数となるものはほとんどない。それどころか整数にならず1/4歩あるいは1/8歩単位の端数の出るものも多い。

小方部墳の場合は、墳長をある切りのよい数値とする決定法は行われていないとみてよさそうである。墳長（歩数）が結果としてどうなるかという点には考慮せず、小方部の長さを単位数で指定する造墓指定が行われたと考えるしかない。

4単位型と6単位型の古墳をくらべると、4単位型の主丘部規格の方が総じて大きい。雨宮古墳をのぞくと6単位型では池上古墳などより3ランク小さい径42歩が最大規格である。このことは、小方部の長さを加味して主丘部規格が調整されたことを物語っているようにも思われる。ただし、8単位型には4単位型と同じ径54歩という大規格をもつものがあり、そのように単純な話でもなさそうである。

なお、さきに小方部墳より大きい墳丘規格をもつ円墳が多く存在することの意味を考える必要性を指摘したが、小方部を加えた墳長では池上古墳などは63歩、女良塚古墳などは72歩となるから、墳丘全体では何ランクか上の円墳の規格に相当する規模となる。

小方部墳においても、主丘部規格は6歩きざみ（小規格では3歩ごと）の限定的な規格値が確認されるから、全墳形に共通の主丘部規格の序列表の中から選定されていることはまちがいない。

これに対し墳長に関しては、大規格の前方後円墳の場合とはちがって歩数による指定はなかった。小方部の長さを単位数で指定することで墳丘の全体規模は決められたらしい。いずれにしろ、単位数を選択する際、主丘部と合わせて墳長がどういう数値（歩数）になるかという点は考慮されなかったことはまちがいない。

#### 5) 単位数での決定

小方部長には4単位から9単位まで、7単位をのぞいて5種類確認されているから、そのうちのいずれかの単位数が指定されたことになるが、どのような基準で単位数の選定が行われたものか解答は難しい。今のところ9単位型と確認された4基がいずれも7～8期と新しい時期に比定され、4単位型の古墳は古い時期に多いようであるが、5期には5、6、8単位型が出そろい、6世紀代にも4単位型は多く、小方部長が築造時期を反映するとは認めがたい。

小方部長が時期差を示すものではないとすると、やはり何らかの階層性を視覚的に表現する意図をもって選択されたとみるのが妥当といえる。一般論として、古墳時代を通じて墳丘の壮大さに価値を見いだす風潮があったことは否定できないと思われるので、4単位よりも5単位、5単位よりも6単位と、すこしでも大きな小方部が希求されたと思われる。主丘部の大きさが被葬者の生前の事績や王権内における政治的位置を考慮して指定されたとすれば、小方部の長さについても同じような意図が反映されているとみるの



が自然であろう。

ただし、さきに見たように、比較的大きな主丘部規格をもつものに小方部長最小の 4 単位型が多く、最大の 9 単位型には小さな主丘部規格のことが多い。このような、ちぐはぐとも思える主丘部規格と小方部長の関係をうまく説明することはむずかしく、さきに憶測を述べたように主丘部規格の小ささを補うかのように小方部長が長く設定されたとみられるような傾向も指摘される。問題は複雑であり、結論は保留として今のところ今後の課題とするしかない。

#### 6) 相似墳の存在

9 単位型の 4 例（大園、蕃上山、供養塚、井ノ奥 4 号）の小方部は共に台形の平面プランをもち、前幅も 16 単位と同じで、くびれ部幅が微妙に異なるもの、墳裾輪郭線だけをみればほぼ相似形の古墳といえる。この 4 基は周溝外周プランも馬蹄形と共通する。

長方形の小方部をもつものでは、8 単位型の女良塚、椿山、地山の 3 基が、墳裾輪郭線だけを見れば相似形である。墳丘の立体的構成や周溝外周プランまで厳密に一致するものは今のところ見当たらないが、墳裾輪郭線が相似形の小方部墳はかなり多いのではないかと予測される。

おそらく小方部墳の築造実績の中で、いくつかのモデルプランが固定化し、その設計図が専門的造墓技術者（集団）にストックされていったと思われる。モデルごとに、主丘部規格に応じた総土量、稼動人員数、工期などの概算表なども整備されていたのであろう。

王権から小方部墳の築造を認められ、主丘部規格と小方部長が指定されると、造墓主体者（被葬者の一族）はいくつかの設計図の中から指定内容に合致したものを選び、専門的技術者に施工管理を依頼して古墳づくりに取りかかったような実態が想像される。造墓指定内容の範囲内で、造墓主体者からの注文に応じて細部の設計変更などの調整が図られる場合もあったと思われる。小方部の前方への開き度合いや、周濠外周プランの微妙な変化などは、そのような意図を今日に伝えるものといえよう。

### 3. 小方部墳の成立

#### 1) 単純図形墳の成立

2 種の小方部墳と、やはり 2 種の前方部墳（前方後円墳と前方後方墳）とは、一方は小方部、他方は前方部を墳形に固有の構成要素としてもつという点で、明らかに別個の墳形であるといえることができる。双円墳、中円双方墳の 2 種をくわえると水平的複合図形墳は都合 6 種となるが、これらは類例が僅少であり、各 2 種の小方部墳と前方部墳の 4 種が主要な墳形といえよう。ただし、小方部墳（方）の事例も多くはなく、主要な墳形は 3 種とすべきかもしれない。

各墳形の登場時期はそれぞれ異なる。前方後円墳はその成立をもって古墳の成立、古墳時代の開始とされ、前方後方墳もほぼ同時に定式化が認められる。

次に成立するのは単純図形墳である。円墳と方墳は集成編年 2 期ころからの事例が散見される。近藤義郎は、古期の中小古墳は首長（前方後円墳に葬られたような）の同族のうち首長職務の一翼を担う有力成員の墓で、「首長の容認の下に」築造されたものと規定した（近藤 1983 : P256）。たしかに、いちおう円ないし方形の平面プランをもつものの、全体に不整形で段築成も認められない小型の単純図形墳は、当初倭王権の造墓管理政策の中に正式に位置づけられたのではなく、その墳丘プランも弥生墳丘墓の伝統を受け継いだものや、自然発生的に形づくられたものもあったかもしれない。

やがて単純図形墳も正式に造墓指定の対象として王権の統制下に置かれるようになる。集成編年 3 期のころ、暦年代では 4 世紀中葉前後と思われる。3 期の奈良市富雄丸山古墳（円墳）は径 60 歩(82.2m)の規

格で、第2段の肩を4単位目、裾を8単位目の円周に一致させるという古期の円墳に通有のプランをもつ。この時点で円墳という墳形と、同時に定式化した墳丘プランが成立していることを認めてよい。

この古墳では、24単位設計法と、古墳尺に基づく直径で6歩間隔の主丘部規格値の採用が確認され、その築造が王権の統制下に行われたことを物語っている。同じく3期の奈良市マエ塚古墳は径36歩（49.3m）の規格をもち、やはり第2段の肩、裾線を富雄丸山古墳と同じ単位数としている（沼澤2000a：P26-27）。

24単位設計法によって設計、施工された大型の円墳が3期に登場し、その後、日本各地で急速に増加するのはたしかである。

各地の円墳が、前方後円墳の後円部と同じように古墳尺を用いる24単位設計法という同一の設計原理によって築造されていることは、円墳という単純な形態の墳形ではあるが、各地の首長が見よう見まねで導入を図ったものではなく、王権の統制のもと、その技術的指導を受けて築造が開始されたものであること、また、墳形そのものも、前方後円墳から前方部を取り去った姿として、王権によって創出され、造墓管理政策の中に位置づけられたものである可能性が高いことを示している。

方墳についても、同じようにして生み出されたとみて大過ないと思われ、4期の岡古墳（古市古墳群）では、主丘部規格を方24歩（32.9m）とする24単位設計法が確認される（沼澤2002：P8-10）。

## 2）小方部墳の成立時期

円墳にくらべ小方部墳の成立は多少遅れ、4期の大阪府盾塚古墳や京都府鳥居前古墳（乙訓郡大山崎町）<sup>7)</sup>などが最も古い例とみられる。小方部墳（方）についても三重県明合古墳が4期に、滋賀県天乞山古墳が5期に築造されており、ほぼ同時に成立したことがわかる。

新墳形の創出後ほどなく築造数は急速に増加し、5期に比定される小方部墳は多い。暦年代では4世紀後葉から末葉にかけて新墳形として成立し、5世紀前半のうちに日本各地で数多く築造されるようになった。

その後も、前方部墳の存続期間を通じて小方部墳も数多くつくられ、長く倭王権による築造指定が継続されたことを示している。各地の首長の死に際し、首長権継承の承認にともなう手続きの一環として、一定の指定基準にもとづき、王権から墳形、主丘部規格および小方部長（単位数）が指定され、後継首長によって指定どおり忠実に墳墓の築造が行われた。その際、王権から設計図の交付や専門技術者の派遣が行われたことも想定され、許容される範囲内で、指定内容と施主の希望との調整が図られることもあったと想像される。

## 3）墳形の格づけ

このように時間の経過とともに増加していった各種の墳形は、倭王権による造墓管理政策上、厳格に格づけられていたものと思われる。単純図形墳より複合図形墳の方が上位に位置づけられ、6世紀代までは複合図形墳優位の原則のあったことは疑いえない。

大王墳にも採用された前方後円墳が最高格づけの墳形とされ、前方後方墳はこれに準ずるものであったろう。造墓管理政策上、前方部墳は上位の墳形（以下「上位墳」という）、単純図形墳は下位の墳形（下位墳）として認知されていたとみてよい。小方部墳は、その中間に位する複合図形墳として新たに創出された墳形（中位墳）であることは再三述べてきたところである。

これを要約すると、古墳の墳形を3種に大別した場合、

- ① その成立順序については、前方部墳→単純図形墳→小方部墳
- ② 墳形の格づけについては、前方部墳＞小方部墳＞単純図形墳

という図式として理解できる。

このように筆者は、小方部墳は集成編年の4期おそらく4世紀後葉から末ころに、倭王権によって維持

されてきた古墳の墳形と墳丘規格による身分秩序の表出という造墓管理政策上の必要から、新たに人工的に創出された墳形であると考え。この時期、なぜ新たな墳形が必要になったのかという背景についてはこのあと考察することとして、ここで筆者のこのような理解とは相違する小方部墳の起源論が知られるので、一応の検討を加えておきたい。

#### 4) 纏向墳丘墓との関係

昭和40年代以降、各地で弥生時代後期の墳丘墓が確認されるようになり、円形の主丘部に前方部状の陸橋（突出部）が取りつくものが見いだされ、前方後円墳という独特の墳丘プランの起源問題がほぼ解決した。定型的な前方後円墳として最古と目される奈良県箸墓古墳は、弥生墳丘墓から漸移的に推移してきたことを物語る撥形に広がる前方部をもつが、その長さ、幅、高さとも飛躍的に大きくなっている。

これに対し、箸墓古墳の周囲に点在する纏向石塚やホケノ山など「纏向型」といわれる古墳ないし墳丘墓は、同様に先端が撥形に広がるものの長さは短く、一見すると小方部墳に似た平面形態をもっている。

纏向の諸墳墓（以下、「纏向墳丘墓」という）の年代的位置づけについては意見が分かれており、一は箸墓古墳以前の弥生時代終末期の墳丘墓と捉え、他は箸墓とほぼ同時期の古墳であるとみる。

そのような中、櫃本誠一は「纏向型前方後円墳」は弥生墳丘墓から「バチ形前方後円墳」に至る過渡的形態であると位置づけた。その一方で纏向型前方後円墳からは帆立貝形前方後円墳が派生して後の時代にも残った、前方後円墳における二つの形態は突出部の発展段階を反映すると同時に、「階層的な位置付けとして作用」したと説明する（櫃本2000：P69-70）。

「纏向型」の墳丘墓ないし古墳から、箸墓古墳など櫃本のいうバチ形前方後円墳に発展したという点について異論はない。一方で、小方部墳へ展開していったとみる点に関しては大きな疑問を感じる。

纏向墳丘墓と箸墓古墳の先後関係について、近藤義郎は纏向の諸墳からは特殊器台が今のところ出土していないため明確に比較できないとしながら、伴出土器などからみてそれらが箸墓古墳より確実に古いなどとは到底いいがたいとする（近藤2001：P58-60）。しかし、築造企画論の立場からすると、纏向の諸墳は箸墓古墳成立以前の墳丘墓とみるしかない。

纏向墳丘墓と箸墓古墳をくらべて見ると、前者の平面プランがフリーハンドで描かれたかと思われるのに対し、後者は明らかに定規やコンパスなどの製図器具を使用して描かれていると確信されるほどのちがいがあ。事実、箸墓では24単位設計法という設計方式と、古墳尺という一定の尺度の使用が認められ、この二つの要素が後々長く踏襲されていったことは本稿のこれまでの記述によっても明らかであろう。テラスをそなえる多段築成構造の採用とともに、箸墓の画期性を端的に示す要素といつてよい。

このような墳丘構造を生み出した設計、施工技法は、弥生墳丘墓の技術段階からは自生しえないと思われる、先進地域、おそらく中国からの直接的技術支援を得てはじめて可能になったと考える。「前方後円」という平面プランは弥生墳丘墓からの漸移的発展の結果であるとしても、墳丘の立体構造とその設計、施工技法は、中国の土木技術の導入によって確立された可能性が高い。

倭人の注文に応じて、弥生墳丘墓からの発展系列上の図形を、中国人技術者が一定の尺度と設計方式によって設計図上に定着させたのが前方後円墳という墳丘プランであった、と筆者は考える。このような歴史事象はおそらく倭の女王卑弥呼の死に際して生起したと考えるのが至当である。箸墓古墳以前と以後では、墳丘築成のための設計、施工技法において決定的な差異があることを認めなければならない。

箸墓以後も、西殿塚古墳をはじめとする大王墳クラスの大型前方後円墳は、例外なく24単位設計法によって築造されている。これに対し、纏向の諸墳墓については24等分値企画図による検討を可能とする調査例に欠けるが、古墳尺を用いる24単位設計法が採用されていないことは疑う余地がなく、この点で纏向墳

丘墓は、箸墓古墳以前の墳丘墓と考えざるをえない。

櫃本は、帆立貝古墳が纏向墳丘墓から直接派生したという。箸墓古墳の暦年代観については諸説あるが、上に述べたように築造企画上の画期性からみて箸墓古墳は卑弥呼の墓の可能性がきわめて高く、そうであれば24単位設計法によらない纏向墳丘墓の築造時期は3世紀前半代、どんなに下ってもその中葉に当てざるをえない。

小方部墳の成立が4世紀後半代とすれば100年以上の隔たりがある。その間に纏向墳丘墓から定型的小方部墳へと推移したことを物語る古墳があり、前者から後者へという形態変化の道筋がたどれるのか。この点に関しては大いに疑問であり、小方部墳の概念規定をこれまで見てきたように厳密に行えば、櫃本のような理解は成立しえない<sup>8)</sup>。纏向墳丘墓から小方部墳（帆立貝古墳）が派生したという歴史的事実はなかったといつてよい。

なお、小方部墳の諸属性の捉え方に関し櫃本とは常に対立的立場にある遊佐和敏は、纏向墳丘墓を帆立貝式前方後円墳の祖形ないし初現形とみなすことはできないとするが、初現の時期と成因についての自身の見解は明確にしていない（遊佐1988：P57-61）。

### 5) 古墳の規制論

著名な論文「五世紀における古墳の規制」において小野山節は、前方部の短小な前方後円墳と造出付円墳とを一括して帆立貝式古墳とし、円墳、方墳とともに「規制を受けた古墳」と捉え、そのような古墳の存在状況から5世紀に生じた政治過程を復元しようとした（小野山1970：P73-79）。一般に古墳の規制論といわれ、大きな影響を与えた論文であるが、河内王朝による2段階の造墓規制が5世紀の前半と後半に全国一律に行われたとする理解が成り立ちがたいことについては諸家の指摘にゆずる。

氏の帆立貝式古墳のうち、「前方部の短小な前方後円墳」が小方部墳に当たるが、それは「前方部を極度に短く制限したか」「前方後円墳の後円部の上部だけを独立した墳丘につくった形」とであると規定する。

「5世紀前半のある時期に」地方の首長は河内王朝から前方後円墳の築造に制限を受け、帆立貝式古墳や円墳、方墳をつくらされたという。なぜそのような必要があったのか必ずしも説明は十分でないが、5世紀前半に前方後円墳の一変異形として帆立貝式古墳が誕生したという見方は明確に示されている。ただし、登場の時期については、その後の発掘調査の進展や暦年代観の補正などによって修正が必要であるし、前方後円墳の一種であるとする見方についても再考が要請される。

小野山の規制論を基本的に継承し新展開を図った都出比呂志も、「帆立貝式古墳とは前方後円墳の前方部が極端に短いものをさす言葉」と、前方後円墳の一種とする見方を示し、「急増」の時期は大型円墳と同じ西暦400年前後とし、被葬者の階層性などについても大型円墳との共通性を指摘している。纏向墳丘墓から帆立貝式までの連続性は未確認とするが、典型的な帆立貝式古墳の「成立」の時期については明言していない（都出1988：P1-16）。また、古墳時代を通じて前方後円墳、前方後方墳、円墳、方墳という「4種の基本的墳形とその規模との二重原理によって身分秩序を表示」する体制が維持されたとして、小方部墳（帆立貝古墳）を他の墳形とならぶ独立した墳形とする見方はとっていない。いずれにしても小野山、都出両氏とも帆立貝古墳を前方後円墳の一種とする見方では変わらず、両者によるこのような認識が、遊佐、櫃本氏をはじめとするその後の研究の方向性を規制したことは事実といえよう。

## 4. 小方部墳の被葬者

### 1) 新たな墳形の展開

4世紀中葉から後半という時期に2種の単純図形墳、やや遅れて小方部墳という墳形が創出され、倭王権

の造墓管理政策の中に位置づけられた背景について考えてみたい。

前方後円墳は倭国王の墳墓形式として成立し、列島各地の諸王の墓としても築造が許容された。古墳時代前期における前方後円墳の所在状況からみて、自身の墓としてこの墳形指定を受けることができたのは、倭国王と王族、および倭国王の共立に参画しえたような各地の最有力首長またはその後継者にかぎられたと推察される。井上光貞は初期国家の体制を「諸王共同体」（井上 1986）<sup>9)</sup>と規定したが、その体制にいち早く参画した諸王のための墳形と捉えられる。4世紀代まで前方後円墳の築造指定を受けられる階層に大きな変動はなく、地域的、階層的に指定範囲の著しい拡大は見られない。

そのような状況下で単純図形墳および小方部墳の出現を見ることになる。段階的に追加された4種の中・下位墳の築造数は、5世紀前半以降急速に増加し、その世紀を通じて、それぞれの墳形に固有のプランと大小様々な規格で築造された。諸王共同体の第1次メンバーには加えられなかった階層が、倭王権から古墳の築造を許可されるようになり、古墳の築造指定を受けられる層が大幅に広げられたものと理解される。

新墳形は列島各地に展開するが、予測としては畿内先進地、中でも大王墳が所在する佐紀、古市などの古墳群において第一に採用された可能性が高い。少ない事例からの推測ではあるが、大王墳に付随する陪塚あるいは随伴古墳などと呼ばれる古墳にいち早く採用されたことは、佐紀王陵区のマエ塚古墳（円墳、3期）や古市王陵区の盾塚古墳（小方部墳、4期）など、それぞれの墳形としては最古期に属する古墳の存在から首肯される。

## 2) 王陵区における陪塚（中・下位墳）の被葬者

佐紀、古市、百舌鳥など大王墳と目される古墳が所在する古墳群（王陵区）における、一般に陪塚と呼ばれることの多い中・下位墳（小方部墳および単純図形墳）の被葬者について考えてみたい。

陪塚の性格に関する論説は多いが、ほとんどの論者は、王陵区の中では小型に属する墳長100m前後の前方後円墳をも陪塚に含めた上で立論されている。後述するように、筆者は王陵区内の前方後円墳は大小にかかわらず、すべて大王または王族の墓と捉え、陪塚とはそれ以外の中・下位墳に限定すべきと考えており、以下そのような前提で論を進める。

陪塚の性格についてはじめて本格的に論じたのは西川宏であろう（西川 1961）。氏は、陪塚の被葬者を「首長と密接な主従関係で結ばれた『近臣』」で、「首長の権力行使のための（中略）機関にあつて、各種の権能、職務を分掌する」「原初的な官僚層」と捉えた。卓見であり、ほぼ結論はいい尽くされているといつてよい。近藤義郎もほとんど同様の見解を述べているが、「古市古墳群における中・小の古墳は（中略）あるいは最高首長の親族をもふくめて、営造された（近藤 1983 : P251）」とするのは、大鳥塚古墳などの前方後円墳をも陪塚に含めて考えているためであろうか。

西川が推定する陪塚被葬者は、文献史家によって「世襲的職業をもって朝廷に奉仕する官人の団体」「古くから天皇の従者として朝廷の原始的な職務組織を形成していた集団」などと規定される伴造氏族、端的に言えば、早くから大王家に臣属し、やがて大伴、物部、中臣、土師などの氏族名を名のることになる有力な連姓豪族の墓と捉えて誤まりないものと考えられる。

## 3) 大伴、物部氏の墳墓

連姓豪族のうち大伴や物部は大族であり、5世紀末から6世紀にかけて大連に任ぜられ、軍事力を背景に強大な政治的実権を握ったと伝わる。このような氏族の長の墓としては大型の前方後円墳がふさわしい、と漠然と考えられてきたのではないかと思われる。

しかし、葛城や和珥などの臣姓豪族とは異なり、強勢を誇った6世紀においても大伴、物部両氏が大王家に入れた妃がそれぞれ一人（岸 1966）と極端に少ないことからもうかがわれるように、大王家への臣従

の度は深く、王族や臣姓の大豪族とは身分的に一線を画されていたことはまちがいない。雄略即位前紀の大連任命記事を史実とは認められないとの見方（鎌田 1986）も知られ、小方部墳成立のころにはまだ、大王家の爪牙として国内外の軍事、警察活動などに駆使されていたものと思われる。大伴や物部の族長あるいは有力成員が、4 世紀後半から 5 世紀前半という時期に、大型の前方後円墳に葬られた可能性はむしろ低いと考えるべきであろう。

大伴、物部、土師などは大和と河内（ここでは摂津、和泉を含む広い地域を指している）の両方に本拠をもつが、大和に本拠を置く王権の勢力伸張にともない、何らかの政策的必要上、伴造氏族も河内の要所に配置されたといわれ、その時期は 5 世紀に遡るとされる（熊谷 1992）。4 世紀末には大王墳が河内に進出するが、伴造氏族の首長も王陵区に墓を営むことを許され、生前親しく近侍した大王や王族の墓の近くに葬られるに至ったものと思われる。

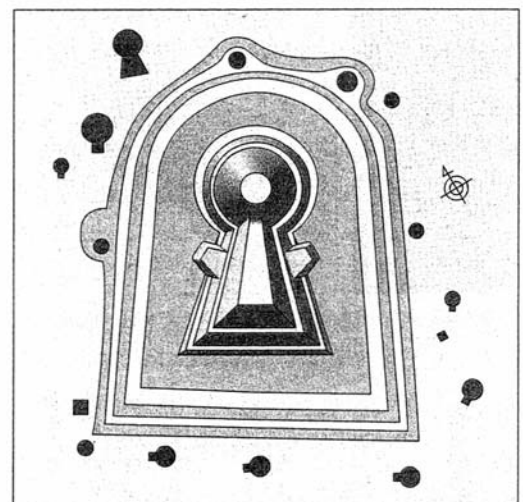
小方部墳は一義的には中央の伴造氏族のために創出された墳形と考えた。このような階層は、佐紀王陵区の段階ではじめて古墳の築造を認められ、当初はマエ塚古墳（円墳）のように単純図形墳に葬られた。身分的な格差から大王と同じ前方後円墳の築造は許されず、前方後円墳から前方部を取り去った円墳という新たな墳形が創出され、伴造階層のための墳墓形式と定められたのであろう。

佐紀のコナベ古墳の周囲を規則的に取りまく陪塚（このような配置の陪塚群を田中琢は「衛星式陪塚」と名づけている。田中 1991）は、現状で見るとすべて単純図形墳であり、早い段階での、陪塚の墳形のあり方をとどめている（図 VII-1）。

河内に王陵区が進出するころ、これより格上の小方部をもつ複合図形墳が創出、採用されたのは、大王家に奉仕する伴造氏族の間にも何らかの階層分化が生じてきた結果であると思われる（図 VII-2）。小方部墳が



図VII-1 コナベ古墳の衛星式陪塚



図VII-2 大仙陵古墳の衛星式陪塚（田中 1991 による）

後の連姓氏族，単純図形墳はより下位の姓を与えられた氏族のための墳形というように，単純に図式化して捉えることもできないと思われるが，氏族の王権内における伝統的な地位，あるいは被葬者個人の生前の事績などに対応して，一定の墳形を指定する何らかの基準が整備されていたものと考えられる<sup>10)</sup>。

この場合も，上位の伴造氏族に対しても前方後円墳の築造が許容されず，これに準じた格式の小方部墳という新墳形を創出して対応したとする見方が成立するなら，これらの氏族に対する大王家あるいは伝統的な諸王（君姓・臣姓豪族）側の抜きがたい差別化意識がうかがわれるといえよう。

なお，後述するように地方における小方部墳被葬者の多くは，軍事をもって王権に奉侍した中小豪族の長と推察されるが，王陵区の中・下位墳にも，軍事をもって大王に奉侍した中央伴造の墓が多く含まれている可能性は高いと思われる。

#### 4) 小方部墳の全国的分布状況

小方部墳の全国的な所在状況はどのようなであろうか。全国に分布する帆立貝古墳のすべてについて作図作業を行ない，突出部長を単位数で把握して小方部墳を抽出し，その築造時期をも確定する作業は今のところ筆者の手に余る<sup>11)</sup>。そこで，全国的な所在状況については遊佐和敏の業績を全面的に利用させていただくことにしたい。

遊佐は主著『帆立貝式古墳』で547基の該種古墳の地名表を公表している（遊佐1988）。その中には，少数の造出付円墳や境界領域の前方後円墳も含まれ，また，その後かなりの新発見例も追加されているが，氏の丹念な集成作業の成果によって分布のおよその傾向を把握できる。

地域別で見ると，近畿地方（ここでは愛知，岐阜を含む2府7県とする）<sup>12)</sup>が最も多く36%，次いで関東が28%，中国が21%で，この3地域で全体の8割5分を占める。四国，九州を加えた近畿以西の西日本全体では65%となり，東日本より西日本に多いという傾向が指摘できる。5世紀代の古墳にかぎってみれば，西日本の比率はもっと高くなるのはまちがいない。

県別では広島県に最も多く（63基），大阪，岡山が40基台で続く。古墳自体の所在数が多い関東では，さすがに栃木，群馬，千葉で30基以上カウントされるが，滋賀，京都，兵庫，奈良，愛知の近畿で軒並み20基以上確認される点は注意される。東北，中部，四国，九州（福岡をのぞく）では各県一桁台の所在数である。以上を総合すると，小方部墳は西日本，中でも近畿，瀬戸内地方に濃密な分布を示すとみてよさそうである<sup>13)</sup>。

#### 5) 鉄製武具の保有

中・下位墳のうち円墳について，田中新史（田中1975）は5世紀後半から末葉にかけて短甲1領埋納古墳が各地で増加し，ほとんどが中規模の円墳であると指摘した。都出比呂志はそのような古墳の被葬者を「杖刀人的階層に近しい「軍事組織の裾野を担う中小首長」（都出1992）とする見方を示した。方墳の被葬者についても同様の性格を認める田中勝弘の見解（田中1980）が知られる。

単純図形墳の被葬者も，各地域の中小首長として領民を支配し，みずからの領土を維持していくために武力が必要である。刀剣や弓矢で武装するのは至極当然のことであり，したがって，それをもってことさらに軍事的というには当たらないが，短甲，冑などの鉄製武具が副葬される古墳については，それらの製作，配付が王権によって一元的に管理されていたとの想定（北野1969，松木1994）にしたがえば，これを入手し得た古墳被葬者には，その反対給付として軍事をもって倭王権に奉侍する軍事的性格があったとみる説明には説得力がある。

小方部墳についても，単純図形墳におけると同様の根拠によって，その被葬者に軍事的性格を認めようとする見解が知られる。古瀬清秀は，広島県三次盆地において5世紀代に古墳築造が開始される古墳群で

は、最初の古墳が大型円墳または帆立貝古墳として現われ、これに付随する小型古墳が激増すること、大型墳に短甲を副葬するものが目立つことなどから、「吉備勢力を牽制すると同時に、朝鮮半島への軍事行動の一端を担った」勢力の伸張を想定している（古瀬 1992）。聞くべき所説といえよう。櫃本誠一も、甲冑や馬具の副葬状態から、帆立貝古墳を「巨大古墳の被葬者を支えた集団のうち」「軍事的役割を担った人達が採用した墳形」と規定し、地方古墳の被葬者についても軍事的性格を推測している（櫃本 1984：P65-67）。ここで小方部墳における短甲等の武具の保有状況について確認しておく、小方部墳として確実な、本稿で企画図を示して説明した事例は表VII-3のとおり 31 基である。このうち正式調査によって副葬品の内容が明らかにされたものは 7 基にすぎないが、このうち 6 基に武具が存在する。4～6 期の比較的古い時期の武具保有率は 100%である。唯一武具が確認されなかった東京・狛江亀塚古墳（8 期）では、高句麗系とされる金銅製毛彫飾板のほか鉄地金銅張の f 字形鏡板や剣菱形杏葉などの馬具が出土し、被葬者として騎乗の武人を想定してもおかしくはない。ほかに、正式調査による出土ではないが、滋賀県供養塚古墳でも短甲の出土が知られる。

本書で取りあげた古墳は、24 等分値企画図による検討可能な、平面プランの遺存度のよいものが優先され、副葬品の内容に関しては無作為の抽出となっている。そのような資料群において、例数は少ないとはいえ、ほぼ 100 パーセントの武具保有が確認されることは、小方部墳における鉄製武具の保有率が、円墳

表VII-3 小方部墳における武具保有状況表

| 番号 | 古墳名    | 所在地 | 時期  | 主丘部規格 | 小方部長 | *主体部発掘の有無 | **武具の有無 | 種別      |            | 備考     |
|----|--------|-----|-----|-------|------|-----------|---------|---------|------------|--------|
|    |        |     |     |       |      |           |         | 短甲      | 冑          |        |
| 1  | 盾 塚    | 大阪  | 4   | 42歩   | 6    | ○         | ◎       | 方形板革綴 2 | 三角板革綴衝角付 2 | 盾13以上  |
| 2  | 乙女山    | 奈良  | 5   | 78歩   | 4    | △         | —       |         |            |        |
| 3  | 池 上    | 奈良  | 5   | 54歩   | 4    | —         | —       |         |            |        |
| 4  | 月の輪    | 岡山  | 5   | 45歩   | 4    | ○         | ◎       | 横矧板革綴   |            |        |
| 5  | 野毛大塚   | 東京  | 5   | 48歩   | 4    | ○         | ◎       | 長方板革綴   | 三角板革綴衝角付   |        |
| 6  | 雷電山    | 埼玉  | 5   | 54歩   | 4    | —         | —       |         |            |        |
| 7  | 女良塚    | 三重  | 5   | 54歩   | 8    | —         | —       |         |            |        |
| 8  | 雨宮     | 滋賀  | 5   | 48歩   | 6    | —         | —       |         |            |        |
| 9  | 地山     | 滋賀  | 5   | 48歩   | 8    | —         | —       |         |            |        |
| 10 | 樋渡     | 福岡  | 5   | 24歩   | 5    | —         | —       |         |            |        |
| 11 | 鞍 塚    | 大阪  | 6   | 30歩   | 6    | ○         | ◎       | 三角板革綴   | 三角板鉄留衝角付   | 馬具     |
| 12 | 椿 山    | 滋賀  | 6   | 54歩   | 8    | ○         | ◎       | 長方板革綴   |            | 盾      |
| 13 | 赤堀茶臼山  | 群馬  | 6   | 36歩   | 6    | ○         | ◎       | 三角板皮綴   |            | 鏡 2    |
| 14 | 舞台1号   | 群馬  | 6   | 24歩   | 6    | —         | —       |         |            |        |
| 15 | 高塚1号   | 三重  | 6～7 | 42歩   | 6    | —         | —       |         |            |        |
| 16 | こうじ山   | 大阪  | 6～7 | 27歩   | 8    | △         | —       |         |            |        |
| 17 | 久保田山   | 滋賀  | 7   | 42歩   | 4    | —         | —       |         |            |        |
| 18 | 御願塚    | 兵庫  | 7   | 30歩   | 6    | —         | —       |         |            |        |
| 19 | 神前山1号  | 三重  | 7   | 21歩   | 6    | △         | —       |         |            | 画文帯神獣鏡 |
| 20 | 供養塚    | 滋賀  | 7   | 27歩   | 9    | △         | ◎       | 横矧板鉄留   |            |        |
| 21 | 井ノ奥4号  | 島根  | 7   | 30歩   | 9    | —         | —       |         |            |        |
| 22 | 高崎情報団地 | 群馬  | 7   | 27歩   | 4    | —         | —       |         |            |        |
| 23 | 小立     | 奈良  | 7   | 21歩   | 6    | —         | —       |         |            |        |
| 24 | 上大縄    | 広島  | 7？  | 15歩   | 4    | —         | —       |         |            |        |
| 25 | 狛江亀塚   | 東京  | 8   | 24歩   | 6    | ○         | —       |         |            | 馬具     |
| 26 | 大 園    | 大阪  | 8   | 24歩   | 9    | —         | —       |         |            |        |
| 27 | 蕃上山    | 大阪  | 8   | 27歩   | 9    | —         | —       |         |            |        |
| 28 | 磯崎東    | 茨城  | 8～9 | 24歩   | 5    | —         | —       |         |            |        |
| 29 | 御 塚    | 福岡  | 9   | 48歩   | 4    | —         | —       |         |            |        |
| 30 | 若宮八幡   | 群馬  | 9   | 27歩   | 6    | △         | —       |         |            | 乳文鏡    |
| 31 | 塚廻り4号  | 群馬  | 9   | 12歩   | 8    | —         | —       |         |            |        |

凡例

\*主体部発掘の有無 ○ 学術発掘歴あり

△ 非学術発掘歴あり

— 主体部未調査または調査時点で主体

\*\*武具の有無 ◎ 遺物現存

— 出土なし、または出土の伝承なし



などの下位墳にくらべて著しく高かったことを推測させる。

ほかに、筆者の作図作業によって小方部墳と確定され、なおかつ副葬品の内容が明らかな古墳は驚くほど少ないが、静岡県千人塚古墳（浜松市）、京都府私市円山古墳（綾部市）、広島県三玉大塚古墳（三次市）、福岡県小田茶臼塚古墳（甘木市）などは、いずれも比較的大型の主丘部規格をもち、鉄製武具をともなっている。ある程度大型の主丘部規格（＝規模）をもつ小方部墳における鉄製武具保有率の高いことが理解される。

以上見てきたように、小方部墳は、4世紀末ころに成立して5世紀代には急速に築造数が増加すること、この時期には近畿・瀬戸内を中心とする西日本に分布の主体があること、そして鉄製武具の保有率がきわめて高いことなどが確認された。これらの事象を総合して判断すると、4、5世紀段階の小方部墳は、朝鮮半島における軍事活動などを契機に、各地の諸勢力を直接掌握して軍事行動に参加させ、あるいは後方支援に当たらせるという倭王権の政策によって、はじめて王権と政治的関係を結ぶことになった地方中小豪族の墓である可能性がきわめて高いのではないかと推測される。

#### 6) 4, 5世紀の倭国の軍事組織

4世紀後半以降、倭国は朝鮮半島で組織的な軍事行動や武力を背景とする外交を展開した。西暦369年の百済の対高句麗戦に倭が参戦した可能性を指摘する所論（川口1993）も知られるが、確実なところでは「倭以辛卯年（391年）来渡海破百残云々」という広開土王碑の記事によって知られる4世紀末からの活動がある。倭国は400年と404年の2度高句麗と戦闘を交え、396年、407年にも百済軍の一支隊として参戦した可能性があるが、連敗に終わったとされる（吉田1998）。

このころの倭軍の編成は文献上明らかでないが、おそらく王族もしくは有力な軍事的伴造氏族の長を指揮官とする大王家直属軍を中心に、畿内や吉備など西日本の有力豪族が派遣した部隊からなる混成軍であったと思われる（ただし神功皇后伝説をのぞくと、王族が外征軍の将軍に任じられた例は推古朝以前には知られない）。各豪族は一族の有力者を将とし、その子弟などを中下級指揮官に任じて、自領内の農民兵を率いて戦場に臨んだものと想像される。諸王共同体ともいわれる政体にあつては、このような軍事編成しか望みえなかったといつてよいであろう。

独立性の高い各地の大豪族は、6世紀になっても筑紫国造磐井のように半島への出兵を拒んで叛乱を起こす者があつた例からみて、4、5世紀段階では出兵に素直に応じない者があつたとしても決して不思議ではない。また、出兵しても現地での作戦命令に素直にしたがわない者もあつたであろうことは、雄略紀9年条に記された朝鮮派遣軍の将軍間における内紛伝承などから推察できる。

このときの朝鮮派遣軍では紀小弓宿禰、蘇我韓子宿禰、大伴談連、小鹿火宿禰の4人が大將に任じられたとされる。このうち蘇我韓子は架空の人物とみる説<sup>14)</sup>が有力なように、この記事にどれほどの信憑性があるか疑問はもたれるものの、初期の朝鮮派遣軍の実情をよく伝えているように思われる。

大伴談連は大王家直属軍の実質的な指揮官とみられるが、4人は並びの将軍であつて、大王軍の指揮官が一段高く位置づけられ、全軍に指揮権が及ぶような軍編成となつていたようには読み取れない。基本的に4将の指揮権の及ぶ範囲は自軍内にとどまり、連合軍というにはほど遠い寄り合い所帯であつたと推察される（この記事で、雄略即位時に大連に任じられた大伴室屋ではなく、談連が大王軍の指揮官として派遣されていることは注意しておきたい記述である）。

朝鮮半島における初期の戦闘での敗戦に直面し、王権中枢部では、騎馬軍団の整備や武装の強化などの必要とともに、朝鮮派遣軍の組織そのものの整備、強化が急務として痛感されたにちがいない。理想としては、最高司令官のもとに各級指揮官がピラミッド状に配置され、厳しい軍律によって作戦命令が忠実

に実行される軍隊組織の確立が希求されたであろう。

その第一歩として、大王家直属軍を強化してその戦闘力を高め、諸豪族に対して武力的に優位に立ち、その力を背景に軍令を徹底させ、派遣軍全体の戦闘力を高めるという対策が検討され、そのために打ち出された具体策が、各地の中小豪族を軍事的トモ（伴）として直接掌握するという施策ではなかったろうか。

### 7) 軍事的職業部の設置

大王家直属軍においては、最高司令官には王族または最有力伴造氏族のしかるべき者が、上中級指揮官（実質的司令官）には来米、佐伯、建部などの軍事的氏族の長が任じられたと思われる<sup>15)</sup>。その部隊は、初期の段階では大和の農民兵を主体として編成されていたとみられるが、これだけでは動員兵力に限界がある。

安定的に戦闘力を確保するため、各地の大豪族の支配下でない独立的な中小首長でそれまで王権との関係をもたなかったもの、あるいは大豪族の傍系氏族など相対的に独立性の高い中小首長を直接掌握し、武器、武具などを支給して、軍令に忠実な戦闘力に仕立てる政策が採用された。

中央の軍事的伴造氏族は、王権の命によって西日本を中心とする各地のそのような中小豪族に対するリクルート活動を組織的に展開し、来米部や佐伯部などの地方伴造氏族として傘下に治めた。来米直や来米部の分布は畿内周辺と西国を主とするとされ、佐伯部は播磨、讃岐、阿波、安芸の4国に設定され、その地域の国造級豪族が佐伯直となって佐伯部を管掌し、平時には中央に上番して佐伯連の指揮下に入り、王族や宮都の警護に当たったとされる。有事の際には、王族軍の前線部隊として、中央伴造にしたがって渡海したことであろう。

このような関係は複数の中央伴造氏族と多数の地方中小豪族との間で成立したとみられ、軍事にかぎらず各種の職掌をもって奉仕する職業部も設定されていたはずであり、また、上番型だけでなく貢納型の部も多く設定されたことは文献史家の説くとうりであったろう。

古代においても、軍事行動において最も必要とされたのは、最前線で戦う下級指揮官であり兵卒であった。最も消耗は激しく、強い軍隊を維持し続けるためには、その供給源を幅広い地域、階層に求めなければならない。大王家直属軍の尖兵をこのように広範な地域、階層に求めるという施策は、中小豪族の直接掌握によって王権の軍事力を強化する成果をもたらすとともに、一方で地方の伝統的大豪族の武力、財力を抑制するという効果をももたらしたものである<sup>16)</sup>。

さきに、単純図形墳や小方部墳は、軍事をはじめとする各種の職業部として伝統的に倭王権に奉侍した中央伴造のために創出された墳形であったと推定したが、このような施策によって中央伴造を介して新たに倭王権の直接的掌握下に入った階層に対しても、王権への貢献の度に応じて築造が許されたであろう。特に小方部墳については、初現の時期からみて、その契機が朝鮮半島における軍事行動の本格化にあったこと、したがって一義的には中央、地方の軍事的伴造のために創出された墳形であろうことも疑いえないところと考える。ただし、軍事的伴造氏族のための墳形が小方部墳にかぎられるものではなかったことは、円墳や方墳にも軍事的性格の色濃いものが多数存在することから明らかである。また、小方部墳に軍事以外の職業部の長が葬られた可能性もまったく排除されるものではない、と今のところ考えている。

## 5. 墳形の差異と意味

### 1) 同祖同族の観念と墳形

各地の中小首長の死に際し、その墳形は、4種類の中・下位墳（2種の小方部墳と円墳、方墳）のうちから、どのような基準によって選定されたのであろうか。

中央伴造氏族によるリクルート活動によって、その地方伴造として当該部を管掌することになり、半島での軍事行動をはじめ、それぞれの職能に応じて王権のために奉仕した地方中小豪族の長は、その死に際して、おそらく中央伴造の仲介によって、王権から古墳の築造を許可され、墳形と墳丘規格の指定を受けたものと想像される。結論を先に述べると、地方中小豪族の首長は、生前に直接近侍し行動をともにした中央伴造が、その氏族の墓として伝統的に築造を認められてきたものと同じ墳形を指定されたと考える。

前方後円墳の成立と各地での築造は、各地の部族の長が伝統的祭祀形式を離れ、前方後円墳祭祀を受け入れて、大和連合との擬制的同祖同族関係に入ったことを示すといわれる（近藤 1983：P206-207）。後世、皇別氏族として天皇系譜に連なると観念された君姓あるいは臣姓の豪族は、倭王権伸張の初期の段階で、大王家との直接的な接触によって擬制的同族関係に入り、その証しとして前方後円墳という大王家と共通の墳形を営むことを許されたものと理解される。墳形の共通性にそのような意味を見いだすことができるのであれば、中・下位墳の墳形指定に関しても同様の意義を認めてよいと思われる。

大伴氏と佐伯氏は同祖同族とされ、それは令制以前に佐伯氏が大伴氏のもとで宮門警備などの同じ軍事的任務に就いていたためではないかという（直木 1968：P56-57）。地方豪族についても、中央伴造氏族のトモとして同じウヂ（氏）の名を負い、その職を世襲的に継承して長く行動をともにすれば、同祖同族の意識が醸成されるのは自然の成りゆきといってよい。その間に互いの子女の婚姻によって、実際に姻戚関係に入ることもまれではなかったと思われ、同祖同族観念が成立、強化されることは自然なことといえる。

そのようであれば、地方首長の死に際し、「我が君」<sup>17)</sup>として仕えてきた中央伴造の長と同じ墳墓型式が希求されるのは至極当然といえ、その斡旋によって、望みにしたがって王権からの墳形指定が得られたものと考えられる。

小方部墳を含む 4 種の中・下位墳は、伴造氏族のための墳墓形式であり、主従関係にあった中央と地方の伴造氏族の長は、それぞれ同じ墳形の古墳に葬られたと推察した。

中央伴造がどのような基準で 4 種類の中・下位墳のうちから一定の墳形を指定されるに至ったものかという点に関しては、先述のとおり今のところよくわからない。ただ、王権内での伝統的地位、大王家との親疎などに応じて中央伴造氏族間にもおのずから序列が生じ、複合図形墳優位の原則から、上位の氏族には小方部墳の墳形指定が行われるようになっていたことはまちがいない。

## 2) 部民制の萌芽

地方における中・下位墳は、中央伴造を介して倭王権の支配下<sup>18)</sup>に入った地方中小首長の墳墓であると推定したが、このような王権の軍事機構への地方中小豪族の編入という歴史事象は、一般に大和政権による部民制の拡充といわれる政策の一側面と捉えて大過ないものと思われる。

部民制は各地の地方族長を大王のトモに組織し、それを中央のトモノミヤツコが統括するという、大和政権による全国的な人民支配の体制であるといわれる（鎌田 1984）。このような体制は 5 世紀後半の雄略朝に著しく整備されたといわれるが、4 種類の中・下位墳の創出と地方への展開を以上のように評価すると、部民制の全国的整備は定説より早く、4 世紀末から 5 世紀前半期を通じて著しく進展したものと思えることとなる。

直接的には朝鮮半島における軍事行動を有利に進めるため、各地に軍事的トモが設定され、倭王権の軍事力の強化が図られた。その結果、意図したとおり王権の著しい強化が実現し、反面、地方有力豪族の相対的弱体化にもつながった。雄略朝のこととして語られる葛城や吉備の勢力の衰退は、4 世紀末以降の王権による体制整備の結果といってよいであろう。

一般に 5 世紀後半の雄略朝に王権の専制化への画期が認められるとされるが、4 世紀後葉から末にかけて

の小方部墳という新墳形の創出、そして5世紀前半以降の築造数の増加という現象の背景を以上のように推定するとき、この時期における軍事力を背景とする王権の著しい強化を見いだすべきであり、むしろ4世紀末から5世紀前半を日本の国家形成期における大きな変革期と認めるべきではないかと考える<sup>19)</sup>。

### 3) 靫負の制と古墳

直木孝次郎によれば、5世紀後期には、地方の国造・伴造級の豪族が自領の農民兵を率いて上番し、上番中だけ靫負（靫部）を称して大伴氏や丹比氏に率いられるという靫負の制が成立したという。このころから6世紀前葉の継体朝にかけて、来米氏などの中央の軍事的伴造氏族も大伴氏の指揮下に入るようになったとされ、大王軍の編成が大きく整備、拡充されるとともに、大伴氏の勢力が著しく伸張したことが理解される（直木1968：P35～51, 209～211）。

靫負として上番した豪族は、国造・伴造級の者であればすでに古墳の築造実績があり、前方後円墳をはじめとして氏族に固有の墳形が固定されていた可能性も高いが、この時期にはじめて大伴氏などを介して靫負として大王軍に組み入れられた豪族の場合は、中・下位墳の築造を指定されたものと思われる。また、国造・伴造級の豪族の一族の中から本宗以外の者が軍事作戦に動員された場合などには、中・下位墳の築造を新たに認められることがあったと推測される。

### 4) 東国舎人と古墳

靫負と対照的な軍事力として舎人の存在が知られる。靫負が、主として畿内周辺や西国の豪族が自領内の農民兵を率いて上番する朝廷全体の兵力であったのに対し、東国舎人（いわゆるB型舎人）は、国造級豪族の子弟が若干の従者を随行する程度で出仕して大王や王族の側近に仕える大王家直属の兵力であり、皇位継承などをめぐる皇室内部の対立を背景に、「天皇や皇子が、自分の身体と地位の安全のために、直属の武力の強化」を図ったものとされる。B型舎人の出現は6世紀に入ってからで、東国国造はその地位の安定のため舎人の派遣を世襲化したという（直木1968：P107～135）。

6世紀、中でもその後半に、関東地方では他地域にくらべ際立って多くの前方後円墳が築造された。大半が墳長50～60m程度かそれ以下の中小規模の古墳であるが、その被葬者に舎人として大王家に出仕した国造一族の者を想定して大きな誤りはないであろう。

靫負が大伴氏など中央伴造氏族の指揮下に入ったのに対し、舎人は大王や王族に直接奉侍したことから、国造家本宗の当主でない場合も、舎人として出仕した経歴をもつ者には前方後円墳の築造が認められたものとする。東国国造の約7割は皇室と血縁関係があるとする伝承をもつ（西国では4割）。上毛野など一部の大国造をのぞく中小首長は、大王家の権威を借りる代償として一族をもって精鋭の兵力を恒常的に派遣し、その功をもって皇別という系譜と、前方後円墳の築造指定が得られたものと推察される。

古墳時代後期の東国（特に関東地方）に中小規模の前方後円墳が多く築造されたことについての上述のような理解は、中央伴造氏族を介して王権に奉侍した氏族の長が中・下位墳の墳形指定を受けたとする理解と整合するものといえよう<sup>20)</sup>。

### 5) 乙女山古墳の被葬者

小方部墳の各地における出現状況は地域ごと、あるいは古墳群ごとに異なるといつてよい。都出比呂志は、①4世紀代に2,3代大型上位墳を営んできたところ5世紀前葉になって中・下位墳に転換する場合、②顕著な首長墳の伝統がまったくなかったところに突如大型の中・下位墳が登場する場合、と大きく2つのパターンがあると指摘する（都出1992：P29）。

②のケースについては、筆者のこれまでの説明のように、中央伴造氏族によるリクルート活動によって地方伴造となった地方中小豪族が、古墳の築造を新たに開始した結果と理解すればよいと思われる。

そのほか、4世紀末ころから中・下位墳が上位墳に混じって築造され、以後も両者がともに築造され続けるケースもまれではなく、第3のケースといってよいであろう。最も顕著な例は古市や百舌鳥などの王陵区に見られるが、ほかにもいくつかそのような実態を示す古墳群がある。

奈良県の馬見古墳群における各墳形の存在状況は王陵区に近いものがあり、4, 5世紀に大王家に匹敵するほどの強勢をほこったとされる葛城勢力の墓所にふさわしい状況といってよい<sup>21)</sup>。三吉石塚古墳のように王陵区における陪塚に類する存在形態を示す中・下位墳も多い。

そのような中、乙女山古墳は小方部墳でありながら、その主丘部は径78歩（106.9m）という大規格をもつ。これは同じく大和盆地南西部地域の、ある時期の盟主墳である川合大塚山古墳や掖上鐘子塚古墳の後円部と同じ規格である。埼玉県丸墓山古墳（円墳とされる）も同規格であり、例外的な大規格をもつ宮崎県男狭穂塚古墳をのぞけば、中・下位墳としては最大の規格をもつことが注意される。

#### 6) 葛城軍の指揮者

小野山節の論（小野山 1970 : P78）にしたがえば、巢山古墳被葬者の後継首長は、河内王朝からの規制のため前方後円墳を築けなかったと解されることになるが、5世紀前半代にも葛城勢力の首長墳として新木山、築山、室大墓など墳長200m級の前方後円墳が築造されており、乙女山古墳の被葬者像に迫るには別の解釈が必要であろう。

ここでも結論を先に述べると、乙女山古墳の被葬者は、葛城勢力の一族ではあるが、伝統的に最高首長を出すことのない家筋の出身者で、朝鮮半島派遣の諸王連合軍を構成する葛城軍の指揮官として活躍し、殊功を上げたことによって、特に中位墳の築造指定を認められたものと推察する。その功績が絶大であったことは、中・下位墳として最大級の主丘部規格をもつこと、また造出の付設を許されていることから理解される（造出付設の意義についてはⅧ章）。

4世紀末から5世紀初頭にかけて、朝鮮半島で活躍した人物として葛城ソツヒコ（襲津彦）の存在が目される。井上光貞の研究によって「皇室を除いてその実在のたしかな人のはじめ」（井上 1965 : P71）とされ、御所市の室大墓古墳をソツヒコの墓とみる見解（白石 1973）も知られる。墳長200m級の前方後円墳である室大墓古墳は、たしかに葛城勢力の最高首長の墓にちがいない、ソツヒコの墓とみて支障ないといえるかもしれない。

日本書紀によればソツヒコは数回朝鮮半島に渡り、相当長期にわたって滞在して活動することもあったとされる。英雄時代の王のような活躍ぶりであるが、葛城氏という倭王権に拮抗する勢力をもつ大族の最高首長が、長期間本拠地を離れ、危険に満ちた海外での軍事活動に参加するようなことが、この時期実際にありえたのであろうか。

加藤謙吉は、ソツヒコは特定の人物ではなく、この時期の「倭の対朝鮮外交や軍事行動に関与した葛城地方の土豪たちの活動を、襲津彦という一人の人物に収斂し、伝承化したもの」（加藤 2002 : P15-16）との見解を示している<sup>22)</sup>。したがうべき所説と思われる。実際に渡海して活躍したのは葛城勢力の一族ではあるが、最高首長あるいはその後継と目された者ではなく、一族中のしかるべき有能者ではなかったろうか。

このように考えると、乙女山古墳には、ソツヒコとして形象化された、実際に朝鮮半島に渡り活躍した人物が埋葬されている可能性はきわめて高いと推察される。小方部墳が第一義的には、軍事をもって奉仕する中央、地方の伴造氏族のために創出された墳形とする推定の延長上の思考として、許される帰結といえよう。

岡山県小盛山古墳（4～5期）は径72歩（98.6m）という大型の円墳で、この規格は乙女山古墳、丸墓山古墳の1ランク下という大規格である。このような大型の規格をもち、また乙女山と同じように造出をそ

なえている共通点からみて、この古墳の被葬者にも乙女山同様の軍事的性格を認めて大きな誤りはないと考える。吉備勢力が派遣した豪族軍の実質的最高指揮官として渡海し活躍した、吉備一族中の傍系首長の墓である可能性が高い。

## 6. 造墓指定の政治的機能

### 1) 古墳築造の一元的統制

これまでの検討によって、小方部墳（帆立貝古墳）においても古墳尺6歩ないし3歩きぎみの限定的な主丘部規格の存在が確認され、小方部や造出の長さや幅が、主丘部直径の24等分値によって割りつけられている実態も明らかにすることができた。このような限定的な主丘部規格の存在については、すでに円墳や前方後円墳の後円部でも確認してきたが、一定程度以上の大型古墳において、好き勝手な規模で墳丘が築かれることが基本的になかったという事実は、墳形や主丘部規格の選択が造墓主体者によって任意に行われたものでは決してないことを物語るものと解される。

あるいは、専門的造墓技術者が個別に注文を受け、望みに応じていくつかのプランを提案し築造にいたるとようなプロセスも考えられないわけではないが、大王墳を頂点として葛城、吉備、上毛野など中央、地方の有力豪族の本拠とみられる地に、文献上知られる当該豪族の政治的力量に対応するような規模をもつ大型古墳が今に残されている事実を見れば、古墳の築造は倭王権による一元的な統制のもとに行われたと了解できる。倭王権内における被葬者生前の政治的立場、力量、生涯の事績などを総合的に判定して、王権中枢において一定の基準にもとづいて墳形と墳丘規格が決定され、後継首長に対して営むべき墳墓の指定を行う制度が古墳時代を通じて維持されたとみるべきであろう。

文献史家の一部からは、古墳時代の政治体制を復元、検証する上で、「古墳の規模・立地は、二次的な意味しかもちえない」（吉村 1999）、あるいは「古墳の墳形と規模とに、王を頂点とした身分序列や、国家機構の初期形態を読み取るのは、やはり求め過ぎ」であり、『前方後円墳』は倭人の文化的内容を示すのであって倭国の政治体制までは示さない」（山尾 2003）という見解が示されている。古墳築造が果たした政治的役割を過小に評価する立場といえるが、このような見解は寿陵肯定説と結びついている場合が多い（上記2氏も同様）。

中には、大王は即位と同時にみずからの墳墓の造営に着手したとする極端な言説すら知られる。寿陵の問題については別に検討する機会をもちたいと考えているが、大王墳の場合その規模は、治世年数や在位中に成し遂げた事績や獲得した権力の大きさ、倭の五王であれば宋から除正された官爵号などをも総合的に判定し、最終的には後継大王によって決定されたとするのが筆者の理解である。

即位時点では、大王としてどれほどの業績を成しえるかまったく未知数であるのに、その時点で営むべき古墳の規模をどのようにして決定できるというのであろうか。この一事をもってしても、寿陵説が成立しえないのは明らかである。

棺を蓋いて定まるという。中央、地方の豪族についても、古墳の墳形や規模は、被葬者の死後、一代の事績や王権内におけるウヂの伝統的位置づけなどが総合的に判定されて、最終的には大王によって決裁されたと考えるべきであろう。したがって、古墳の存在状況は倭国の政治体制を「反映する」とみなければならない。

### 2) 西嶋説と都出説

前方後円墳のプランは時間の経過とともに変化し、その変化は全国各地でほぼ一律に生じたことは一般論として承認される事象といえよう。早く西嶋定生は、このような変化の「共通的傾向」から、

「各地域の墳型を規制する統一的契機が存在した」と想定し、古墳造営は、地方豪族の国家秩序への編入を示し、墳形は「国家的身分制の表現」であり、「大古墳の存在は豪族権力の物量的表現」と指摘した（西島 1964 : P216-217）。

これを都出比呂志は、墳形によって首長の系譜と格式を、規模によって実力を示す「二重原理」による身分表示方式と説明し、古墳時代の政治秩序を「各地の首長の政治的地位を前方後円墳を機軸として表現する」「前方後円墳体制」と規定した（都出 1991）。古墳築造が果たす政治的意義については、基本的にこのように捉えなければならない。

ただ、都出が寿陵説を肯定する立場をとっていないとすれば、上述の見解は古墳時代の政治体制の説明としてそれはそれでまちがいないとしても、いささか説明不足の感は否めないように思われる。

死後、生前における政治的地位を表現する古墳の築造を認められたとして、そのことでなぜ大王を頂点とする各地の諸王共同体ともいわれる政治体制が維持されたのか、あるいは各地の首長はなぜ指定どおりの古墳を忠実に築造し続けたのかという疑問が残るのであり、各地の首長の政治的立場をその死後に古墳によって「表現」することにどのような政治的機能があったのか、具体的に説明する必要がある。

広瀬和雄は、「前方後円墳には祭祀的かつ政治的色彩が色濃く表れているが、それはあくまでも死した首長の葬送儀礼をめぐることで（傍点引用者）」として、古墳築造が果たす具体的機能について自身の解釈を述べている（広瀬 2003）。古墳の築造に高い政治性があった点は事実といえよう。広瀬がいう共同体の外に対する政治的また実利的な機能、効用のメカニズムを究明する作業が必要であるが、そのような作業はこれまで意外なほど少ない。

古墳時代を通じて、大王や王族が王家に固有の墳墓形式である前方後円墳を営み続けたことには何の不思議もない。問題は各地の有力豪族が、300 年あまりにわたって大王と同じ前方後円墳という墳形で自身の墳墓を築造し続けたことである。当時の風習、文化の問題として簡単にかたづけず済む問題ではなからう。

### 3) 互酬的同盟関係の確認

女王の共立に参画しえたような各地の最有力首長は、その死に際して、近藤義郎（近藤 1983 : P199-200, 206-207）のいうように、生前に取り結んだ大和勢力との擬制的同祖同族関係の証しとして前方後円墳祭祀によって埋葬され、祭祀を滞りなく執行した後継首長は首長権を継承しえたと思われる。

王権と諸豪族との支配、服属の関係は、いわゆる互酬的（熊谷 2001 : P99-100）なものであったろう。当初対等に近かった両者の関係は、地域やウチごとに遅速はあっても、時間の経過とともに、支配、服属の度を高めていったとみられる。基本的に両者の互酬的同盟関係は古墳時代を通じて維持されたと考える。結論的にいえば、造墓指定にもとづいて行われる古墳築造には、関係継続を相互確認するという重要な機能があったと考える。

同盟関係の継続を認められた首長は、長山康孝が説明したように中央に出仕し、引き続き各種の職務をもって王権に奉仕し、その活躍の度合いに応じて鉄資源をはじめ先進文物を入手できた。したがって、各地の豪族にとっては、王権内で活躍するための政治的地歩を継承し、維持していくことは何にも増して重要事であったと思われる。

上番出仕を怠り、あるいは半島への出兵に応じないなど何らかの問題があった場合には、互酬的關係を王権の側から一方的に破棄する時もありえたであろう。このような場合、すでに上番することも

なかった首長は、その死に際して造墓指定を受けることができず、後継者が中央で活躍する機会も与えられなかった。古墳築造には、引き続き中央で活躍するための必須の手続きという機能があったことは疑いえない。

都出は、各地の首長墳系列の断絶や近隣地域への移動の事実に注目し、これを全国レベルの政変と連動した事象と捉えている（都出 1988 : P8-14）。たしかに各地で首長墳系譜に消長があるのは事実といえるが、大王権力と諸首長との支配、服属の関係が長山康孝のいうように個別的、人格的なものであったとすれば、全国一律の政変を想定するより、個々の豪族と王権との間に何らかの個別的事件が発生し、首長墳系譜の断絶などが引き起こされたと考えるべきではなかろうか。

この場合、少なくとも 4, 5 世紀段階では、在地における支配権を王権が奪い取るような事態は考えられず、首長墳系譜の断絶からただちに在地政治勢力の消滅、衰退を考えるのはいささか短絡的であり、王権の側から互酬的関係の破棄が行われ、当該豪族が王権内での一定の政治的地歩を一時的に、あるいは永久に失ったという事実が読み取れるにすぎないとする（首長墳系譜が移動したとみられるケースでは、在地首長間における抗争によって伝統的勢力が衰退したような事態は想定できよう）。

大型前方後円墳を営むような各地の有力首長は中央へ出仕し、軍事や内政に積極的に参画し、それによって様々な対価が得られたとすれば、政権内での地歩を維持していく重要性は、互酬的同盟関係にあった双方で共通理解されていたはずである。

停滞的、排他的な族制的国家において、新たに「諸王共同体」のメンバーシップを得るのはかなり困難なことであり、女王共立以来の世襲によって王権内での政治的立場を維持していくのが諸豪族にとっては何より重要事であった。

大王墳と共通の形式によって先代首長の古墳を築造する行為は、大王と共通の祭祀を奉じて政治的にも同盟ないし服属関係を継続する積極的な意思表示といえる。大王の側にとっては、諸豪族の願いに応じて造墓指定を行うかどうかという選択は、従来の互酬的関係を継続していくかどうかという政治性のきわめて高い判断となる。当然、その判断は王権の側に主導権があったろう。

#### 4) 首長権継承の必須課程

互酬的同盟関係下にあった各地の有力首長の死に際しては、王権への報告が義務づけられ、首長権継承の承認を求めるとともに、営むべき墳墓の内容について指示を得るという手続きが履行された。後継首長は朝廷に出仕し、長山が想定するように「一定期間大王の宮廷にとどまり（中略）支配者集団としての一体性を確認」（長山 1992 : P77）するような、王権内での地歩を得るための期間が実際にあったと推察される。

一方この間、国もとでは造墓指定にもとづく古墳の築造が進められた。同時進行されたこの二つの行為は、諸王共同体の一員としての地位を継承するための必修課程といえる。造墓指定どおりに古墳を築造するという行為は、後継首長にとっては王権の命にしたがって行うはじめての政治的行為であり、大王への忠誠を内外に視覚的に明示するという、一連の服属儀礼の中でも最重要の要素であった。

古墳には、被葬者が生前に王権内で獲得した政治的地位の最終的到達点が明示されているとみて誤りないと思われるが、それにどのような意味があったのか、この点に関しても何らかの説明が必要である。

造墓指定どおり古墳を完成して正式に首長権の継承は認められ、後継首長は、古墳の墳形と規模によって明示された先代首長の政治的立場を引き継いだとしても、先代首長が一代をかけて獲得した地位に、後継者がそのまま就くのを認められたわけではあるまい。



おそらく、先代首長の地位に比例して、数ランク下の地位を宮廷内で与えられたと想像され、先代の地位の高下に応じて、それ相応の出発点が得られるような仕組みが整備されていた可能性を考えてみたい。墳丘規模によって先代首長が到達した地歩が視覚的に表示され、後継首長の王権内における地位がそれに比例して定まる仕組みであったとすれば、できるだけ大きい墳丘規格の指定が希求されたのであろう。

古墳築造にこのような意義を認めた場合、想起されるのが律令制下における「蔭位」の制である。井上光貞によれば、蔭位制は、族制的契機を一切排除しようとする律令的原則の中で、「族制的、世襲的契機を温存するための令内の隠されたメカニズム」であるとされ、推古朝以降の冠位もカバネと並存し、族姓を顧慮して授けられたという（井上 1986 : P209-212）。

さかのぼって古墳時代にも、蔭位制に類する支配階層の特権維持のための制度が整備されていた可能性は十分考えられる。造墓指定にもとづく古墳築造には、族制的体制維持という基本理念のもと、諸豪族が伝統的な優遇措置を受けるための所定の手続きとしての機能もあったのであろう。

古墳時代にはまだ、後代の冠位制や位階制のように、諸豪族首長の倭王権内における政治的地位を生前から明示するような身分表示制度は整備されておらず、死後はじめて墳形と墳丘規格によって表示される。それは位階の追贈にも似て、名誉ではあっても、それだけの意味しかないのであれば、何代にもわたって、相当の出費を要する古墳をつくり続ける積極的契機にはなりえない。

王権による造墓指定は、一義的には死した首長への顕彰行為であったとしても、その本質は、後継首長の倭王権内での地歩獲得のための必須の手続きという現実的、功利的な色合いの濃い営為へと転化していた。

造墓指定どおりに古墳を築造した後継首長は、中央での共同生活も無事終了すれば、先代の地位に応じた一定の地歩を政権内で獲得できたと思われる。

以上は大型前方後円墳を築いた各地の最有力首長層に関しての想定であり、古墳築造が果たした政治的意義を述べたものである。中・下位墳の築造についても基本的に同様の意義があったはずである。ただ、王権との政治的関係は中央伴造氏族を介して成立し、古墳築造もその関係性の中で行われた点が異なるにすぎない。

## 付論 4, 5 世紀における日向地域の政治動向

### 1) はじめに

古代日向国は、日本神話において特別な位置を占めるとともに、皇室との濃密な婚姻伝承を有するなど、古代史上きわめて特異かつ重要な地域である。その政治的中心は、日向の地名由来説話に登場する子湯県であり、和名抄にいう日向国児湯郡三宅郷に当てられる。その故地には、全国的にもまれなほど前方後円墳が稠密に分布する、西都原古墳群が存在する。群中の男狭穂塚、女狭穂塚の二巨墳は、図抜けた大きさと、神話伝承に富むこの地の特殊性も相俟って、被葬者問題をはじめ様々に論議されてきた。

ともに陵墓参考地として宮内庁の管理下にあるため、その考究は測量図にもとづいて行う墳丘の外形研究が主な対象となる。他の陵墓古墳同様の状況にあり、それだけに正統な築造企画研究が加えられなければならないが、残念ながらそのような研究成果に恵まれたとはいえない。そこで、筆者の 24 単位設計論にもとづく作図作業によって、両巨墳の当初プランを復元的に把握し、その歴史的立場づけに関して若干の考証を試みたい。

### 2) 男狭穂塚古墳の当初プラン

男狭穂塚古墳の墳形（墳丘形式）に関しては、隣接する女狭穂塚古墳築造に際して前方部を削り取られた柄鏡式前方後円墳とする見方（今井 1981）や、未完成の前方後円墳説（網干 1985）、帆立貝古墳説（日高 1968）などが知られる。陵墓図（図VII-3）によるかぎり、たしかに前方部の損傷した前方後円墳<sup>23）</sup>とも見えるが、最新の測量図（長津 1999）を見れば、男狭穂塚は明らかに帆立貝古墳、筆者発案の呼称を用いれば「小方部墳」である。まず、この古墳の当初プランについて復元的に把握し、前方後円墳ではなく小方部墳である点の確認を行っておきたい。

**主丘部** 測量調査報告では主丘部直径130.0～132.0mとされ、これは筆者の尺度論の径96歩（131.5m）の規格に一致する。この値の企画図（図VII-4）を作成すると、墳丘各段の裾、肩の線と円周線との良好な一致が確認される。墳丘第3段裾を7単位目に置き、2面のテラスの幅が各1単位、斜面幅は第2段が2単位、第1段1単位という斜面構成をもつ。これは、畿内の

大型前方後円墳に見られる後円部斜面構成B型と同じであり、径96歩という大型の主丘部規格をもつこととともに、主丘部に関しては畿内の大王墳級古墳に匹敵する内容である。

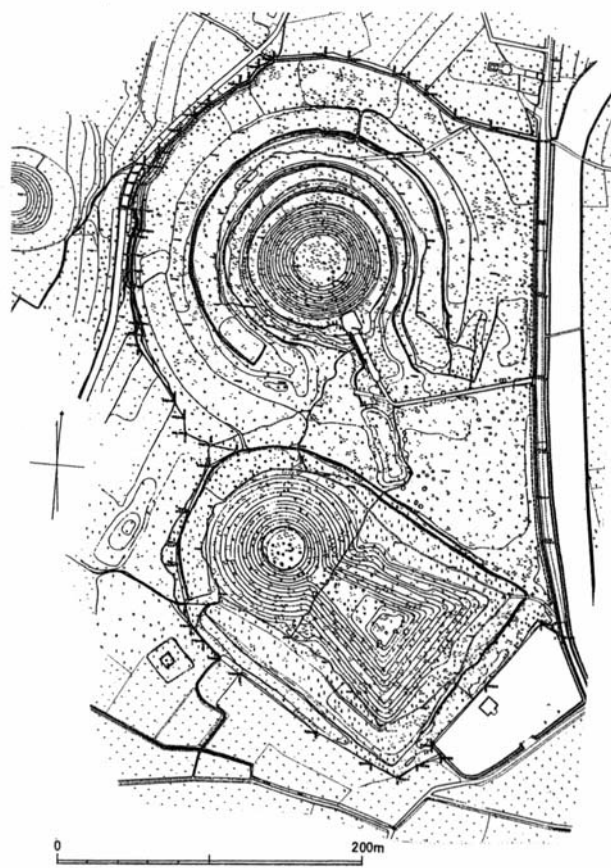
**突出部** 突出部は平面規模が小さく、主丘部より1段少ない2段築成である。墳丘右側では、墳丘第1段斜面は主丘部から突出部へと、同じ斜面幅（1単位）で移行する。くびれ部から右隅角まで、突出部第1段斜面は直線的に延びていき、C点から7～8単位目の横方格線のあたりまで続く。したがって突出部長は6単位以下ではなく、また長さ7単位の突出部をもつ古墳は今のところ確認されていないから、この古墳の突出部の長さは8単位の可能性が最も高い。

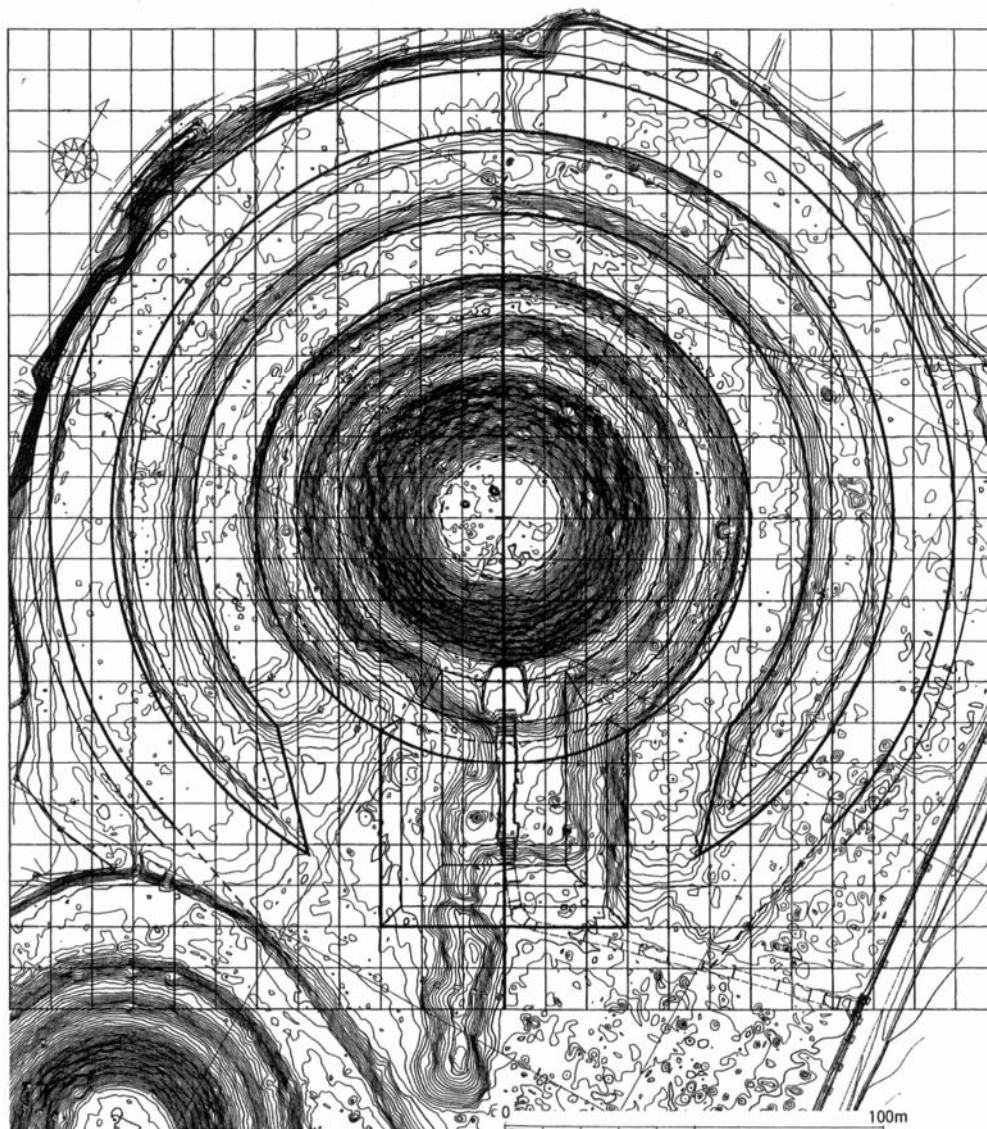
突出部の幅は12単位で、くびれ部から先端に向かって広がることのない長方形プランをもつ。右側縁部ではテラスの幅1単位なので、第2段の幅は裾部で8単位、上面は6単位で問題ない。第2段の長さは裾部でC点から6単位、上面で5単位であろう。

**外縁施設** 墳丘のまわりに二重の周濠がめぐる。内濠は、主丘部まわりでは底面の幅3単位でめぐる。右側の内濠外周線は、墳丘と同心円でめぐっていたものがくびれ部付近で途切れ、そこから直線的に前方へ向かってすぼまるように続く。全体ではいわゆる無花果形の周濠形態となることがわかるが、次第に深さを失っていくため前方部前面での幅や隅角のポイントは正確におさえられない。

中堤は上面の幅2単位、内外の斜面幅各1単位、合わせて4単位の幅でめぐるよう計画されたものと思われる。円環状にめぐり、くびれ部近くで途切れる。

外濠はいっそうはっきりしないが、底面の幅3単位、外周斜面の幅1単位の可能性を考えている。このようにみたととき、女狭穂塚古墳の周濠外周線とぎりぎり重ならず、両者は併存できる。





図VII-4 男狭穂塚古墳企画図（主丘部径 96 歩・131.5m） 1/2000

小方部前面の外濠外周プランもはっきりしない。全体が正円形になる可能性は、ほかの小方部墳の例からみてまずあり得ない。右側で見ると馬蹄形の可能性も考えられるが、わずかにくびれるように見えるので、内濠外周線と同じく無花果形になる可能性が高い。ただ、東京都狹江亀塚古墳のように前面部の外周線がレンズ状に張り出す「眼球形」の可能性も捨てきれない。無花果形、眼球形どちらであっても、女狭穂塚古墳の周濠とは重複しない。

中堤がくびれ部付近で途切れているため、それより前方では内外の周濠は合流して一体化していたとみられる。小方部前面での濠幅は測量図からはまったく判定できないが、底面の幅 3 単位、外周斜面を加えて 4 単位程度の可能性を考えている。

### 3) 男狭穂塚古墳の墳形と規模

従来、いわゆる帆立貝式古墳すなわち小方部墳の定義には諸説乱立して定説がなく、しかも「帆立貝式（形）前方後円墳」という冗長かつ誤った呼称が根強く使われるなど、この墳形の本質が正しく理解されてきたとはいえない。

筆者は、24 単位設計論にもとづく作図作業によって、小方部墳と他の墳形との境界を単位数によって明確に区分した。円形の主丘部に取りつく突出部のうち、その長さが 3 単位以下のものは造出で、その古墳は造出付円墳になる。4 単位から 9 単位までは小方部（小前方部）、その墳形は小方部墳である。長さ 10 単位以上の突出部は前方部、その墳形は前方後円墳となる（沼澤 2006）。

男狭穂塚古墳の突出部の長さは 8 単位であったから、筆者の墳形区分基準に照らせば、この古墳は明らかに小方部墳である。主丘部 3 段に対して突出部は 2 段、周溝の外周形態も前方に向かってすばまっていく無花果形ないし眼球形のプランをもつ点も、前方後円墳ではなく小方部墳である証拠となる。

男狭穂塚の墳丘規模について整理しておく、主丘部規格は径 96 歩（131.5m）、1 単位は 4 歩（5.48m）、小方部長は 8 単位、32 歩（43.8m）、幅は 12 単位、48 歩（65.8m）、墳長は 32 単位、128 歩（175.4m）と復元できる。外濠外周線の最大幅は 46 単位、184 歩（252.1m）であり、主軸線上での全長はこれと同じか、プラス 1 単位（257.6m）程度であろう。

男狭穂塚は主丘部径 96 歩の小方部墳と確定された。筆者は全国の大型前方後円墳について墳丘規格の確定作業を行い、後円部規格の大きい順に上位 53 基の規格表を整備した（沼澤 2005）。その結果、後円部径 96 歩以上の古墳は、吉備の造山・作山の 2 巨墳をのぞくとすべて 5 つの王陵区（大和・佐紀・古市・百舌鳥・三島野）に所在し、すべて墳長が 150 歩（205.5m）以上あることを確認した。一般に墳長 200m 以上を大王墳クラスの巨大古墳とする見方は根強いから、「径 96 歩・長 150 歩以上」を、全国レベルで見た場合の前方後円墳における大型規格と位置づけうる。

径 96 歩の 24 等分値 1 単位は 4 歩と整数になる。最初の古墳である箸墓古墳の後円部径は 120 歩、1 単位は 5 歩、日本最大の誉田御廟山古墳と大仙陵古墳が径 192 歩で 1 単位は 8 歩、古墳時代後期では見瀬丸山古墳に次ぐ規模をもち、真の継体陵の可能性がますます高まりつつある今城塚古墳が径 72 歩、1 単位は 3 歩である。このように、画期的な古墳の 1 単位規格が整数である共通点が偶然ではないとすると、径 96 歩という規格値も一つの節目として、原則として大王もしくは有力王族にのみ許された特別な大規格と位置づけられていた可能性が高い。

径 90 歩と 84 歩になると、丹後や上毛野などの地方古墳でこの規格をもつ例が現れるが、これらの中にも墳長 150 歩以上になる古墳があるので、この 2 つの規格を「準大型規格」として、ある程度隔絶性のある墳丘規格と考えた。そのような区分の妥当性、有意性を示すのが次の事実である。すなわち、この 1 ランク下の径 78 歩（106.9m）になると、小方部墳や円墳などの中・下位墳にこの規格をもつものが現れる。小方部墳では奈良県乙女山古墳、円墳では埼玉県丸墓山古墳が、ともに中・下位墳形としては最大の径 78 歩の規格をもつ。円墳の場合はその 1 ランク下の径 72 歩以下、すべての規格に多数の古墳が存在する。径 78 歩以下には他の墳形の古墳が広範に認められるわけであり、この点は規格値の序列を区分する上で重要な指標になると考えられる。前方後円墳の墳丘規模が急速に小型化する古墳時代後期をのぞくと、全国レベルで見た場合、径 78 歩以下の規格は前方後円墳にとっては「中・小規格」という基準になる。

これを逆にいえば、主丘部規格が 84 歩以上あるのは前方後円墳だけであるが、唯一の例外が男狭穂塚であった。日向という地に、なぜ大王墳級の前方後円墳にしか許されない径 96 歩という大きな主丘部規格をもつ小方部墳が築かれたのか。築造企画論のみならず古墳時代研究上の大問題といつてよい。

#### 4) 日向の首長墳の消長と女狭穂塚古墳の位置

男狭穂塚古墳の当初プランと規模、墳形が確定されたが、これに隣接する女狭穂塚古墳をはじめとする日向地域前方後円墳の規模はどの程度の内容かを見ておきたい。

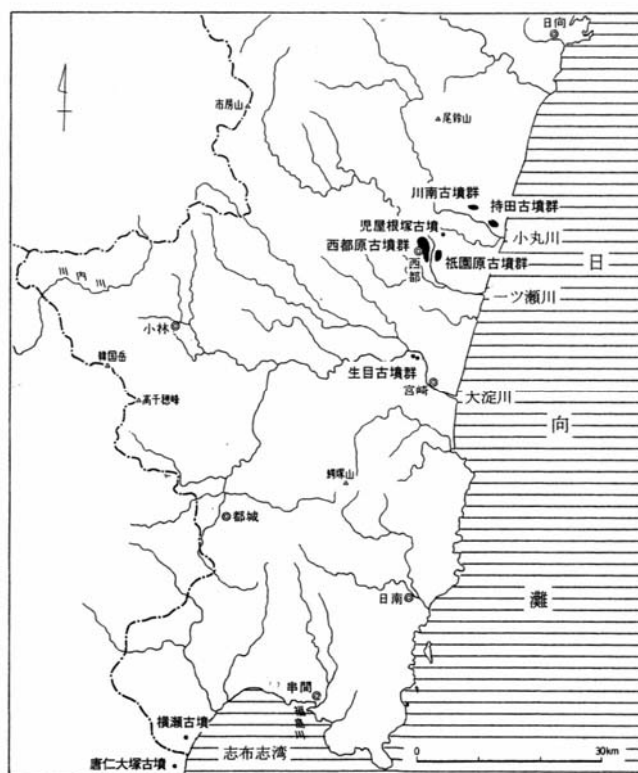
女狭穂塚は径 72 歩 (98.6m) の後円部規格をもつ (図IV - 20)。段築は後円部、前方部とも左側が不明瞭で、右側は比較的是っきりしており、後円部第 3 段裾は半径 7 単位目、2 面のテラスと第 2 段斜面の幅は 1 単位、第 1 段斜面幅は 2 単位で、斜面構成 A 型と確認される。畿内の大王墳と同様の斜面構成をもつ堂々たる前方後円墳である。前方部長 18 単位、前幅 26 単位、墳長は 42 単位、126 歩 (172.6m) で、男狭穂塚よりわずかに小さい<sup>24)</sup>。

女狭穂塚に次ぐ規模をもつのが生目 3 号墳である。後円部規格は径 60 歩 (82.2m)、前方部長 16 単位、前幅 14 単位、墳長は 40 単位、100 歩 (137m) である (紙幅の関係で図面省略。企画図は以下に引く古墳とともに別の機会に発表したい)。後円部第 1、2 段はともに斜面幅 2 単位、第 1 テラスの幅は 1 単位と、大和磐余の地の 2 巨墳、桜井茶臼山、メスリ山と同じ斜面構成をもつ。前方部は 2 段築成と確認されており、メスリ山古墳とは前方部長 16 単位という点も共通する。

生目 3 号墳に次ぐ規模をもつのが曾 (襲) 県主一族の墓 (井上 1978) と目される鹿児島県横瀬古墳で、径 64m と報告 (中村ほか 1988) されるが、トレンチ発掘で確認された周溝内周線の位置を尊重すれば径 54 歩 (74.0m) の規格と捉えるべきであろう。次いで茶臼原 1 号墳 (児屋根塚) が径 48 歩 (65.8m) の規格、以下、生目、西都原、川南、持田古墳群中の諸墳が続く (表 VII - 4) (図 VII - 5)。日向の領域外、大隅の唐仁大塚古墳も径 48 歩という大規格をもつ。

日向の大型古墳の年代に関しては未だ流動的といえるが、生目 3 号墳の墳丘構造が磐余の 2 巨墳に近いから集成編年 3 期前後に位置づけられる。西都原 100 号墳は箸墓古墳と墳丘構造上の共通性 (沼澤 2007) をもつので、同様の低平で細長い前方部をもつ諸墳もおおむね 4 期以前に築造されたとみて大過ないであろう (柳沢 1995)。西都原、川南、持田そして生目古墳群でも、何代かの首長墳が 3 世紀末から 4 世紀にかけて築造されている。

前期古墳の中では生目 3 号墳が傑出した規模をもつが、この時期その首長が日向全域に支配を及ぼしたような事態は考え難い。日向地域の盟主権が生目 3 号墳→女狭穂塚古墳→横瀬古墳 (の各被葬者) と移動していったという捉え方も知られるが、同時期にかなりの有力古墳が各古墳群に併存するので、広域に及ぶ支配権が一つの政治勢力に集中するような体制は考え難い。大淀川流域、一ツ瀬川中流、そして小丸川中・下流に複数の独立的な政治勢力が並び立ち、それぞれ別個に倭王権と政治的関係を結び、その結果として大規格前方後円墳の築造を認められたと考えるべきであろう。規模の大小は、被葬者生前の事績に対応した結果で、王権に対する貢献が多と評価された地域勢力が、時期によってたまたま異なっていたというにすぎないと思う。



図VII-5 日向地域の主要古墳 (群) 分布図

表VII-4 主丘部規格表

| 区分   | ラン<br>ク | 1単位            | 直 径            | 前方後円墳   | 小方部墳                   | 円 墳                          |
|------|---------|----------------|----------------|---|------------------------|------------------------------|
| 超大型  | 1       | 8歩<br>10.96m   | 192歩<br>263.0m | 誉田御廟山・大仙陵   |                        |                              |
|      | 6       | 6歩3/4<br>9.25m | 162歩<br>221.9m | 百舌鳥陵山   |                        |                              |
|      | 7       | 6歩半<br>8.91m   | 156歩<br>213.7m | 造山  |                        |                              |
|      | 10      | 5歩3/4<br>7.88m | 138歩<br>189.1m | 河内大塚  |                        |                              |
| 大型   | 13      | 5歩<br>6.85m    | 120歩<br>164.4m | 箸墓・渋谷向山・仲津山・土師ニサンザイ・見瀬丸山・作山                         |                        |                              |
|      | 14      | 4歩3/4<br>6.51m | 114歩<br>156.2m |   |                        |                              |
|      | 15      | 4歩半<br>6.17m   | 108歩<br>148.0m | 行燈山・市庭・岡ミサンザイ・室大墓                                   |                        |                              |
|      | 16      | 4歩1/4<br>5.82m | 102歩<br>139.7m | メスリ山・ウワナベ・太田茶臼山                                     |                        |                              |
|      | 17      | 4歩<br>5.48m    | 96歩<br>131.5m  | 西殿塚・宝来山・佐紀陵山・佐紀石塚山・コナベ・津堂城山・墓山・市野山・巢山               | 男狭穂塚(宮崎)               |                              |
| 準大型  | 18      | 3歩3/4<br>5.14m | 90歩<br>123.3m  | ヒシアゲ・軽里大塚・築山・新木山・五色塚・神明山・大田天神山                      |                        |                              |
|      | 19      | 3歩半<br>4.80m   | 84歩<br>115.1m  | 西陵・網野銚子山・御墓山  |                        |                              |
| 中・小型 | 20      | 3歩1/4<br>4.45m | 78歩<br>106.9m  | 御廟山・島の山・川合大塚山・掖上鐘子塚・両宮山・蛭子山・浅間山                     | 乙女山(奈良)                | 丸墓山(埼玉)                      |
|      | 21      | 3歩<br>4.11m    | 72歩<br>98.6m   | 桜井茶臼山・古室山・野中宮山・百舌鳥大塚山・今城塚・淡輪ニサンザイ・馬塚・昼飯大塚<br>女狭穂塚   |                        | 小盛山(岡山)                      |
|      | 22      | 2歩3/4<br>3.77m | 66歩<br>90.4m   | 壇場山・甲斐銚子塚・舟塚山ほか                                     |                        | コンピラ山(奈良)・甲山(埼玉)ほか           |
|      | 23      | 2歩半<br>4.43m   | 60歩<br>82.2m   | 断夫山・内裏塚ほか<br>生目3号                                   |                        | 近内鐘子塚(奈良)・壬生車塚(栃木)ほか         |
|      | 24      | 2歩1/4<br>3.08m | 54歩<br>74.0m   | 岩戸山・石山・宝塚1号ほか<br>横瀬                                 | 池上(奈良)・女良塚(三重)・椿山(滋賀)  | 高鷲丸山(大阪)・丸塚(栃木)ほか            |
|      | 25      | 2歩<br>2.74m    | 48歩<br>65.8m   | 玉丘・行者塚ほか<br>茶臼原1号(児屋根塚)・唐仁大塚                        | 地山(滋賀)・野毛大塚(東京)ほか      | 丸山塚(山梨)・金鑽神社(埼玉)ほか           |
|      |         | 1歩7/8<br>2.57m | 45歩<br>61.7m   | 川南39号(大塚)・持田1号(計塚)                                  | 月の輪(岡山)ほか              | 姫塚(千葉)・桃花源(栃木)ほか             |
|      | 26      | 1歩3/4<br>2.40m | 42歩<br>57.5m   | 生目22号・川南11号・新田原48号(弥五郎塚)・松本塚?                       | 盾塚(大阪)・久保田山(滋賀)ほか      | 塚穴山(奈良)・権現塚(福岡)ほか            |
|      | 27      | 1歩半<br>2.06m   | 36歩<br>49.3m   | 持田48号(旧45号)・新田原92号(大久保塚)・西都原46号・72号(一本松塚)・90号(大山祇塚) | 赤堀茶臼山(群馬)              | マエ塚(奈良)・秋葉山(静岡)ほか<br>西都原169号 |
|      | 28      | 1歩1/4<br>1.71m | 30歩<br>41.1m   | 川南18号・西都原13号・83号・95号                                | 御願塚(兵庫)ほか<br>持田62号(亀塚) | 陵山(和歌山)・観音塚(栃木)ほか            |

そのような中、集成編年5期にいたり、径72歩という図抜けた後円部規格をもつ女狭穂塚古墳が登場する。全国的に見ると、同じ後円部規格をもつ古墳に今城塚古墳があり、古墳時代後期では大王墳級の大規格であった。中期では古室山、野中宮山、百舌鳥大塚山の諸古墳があり、有力王族クラスの墓とみられるが同時期の大王墳よりは格段に小さい。地方古墳としては大阪府淡輪ニサンザイ古墳、三重県馬塚古墳、岐阜県昼飯大塚古墳などがあり、紀氏など畿内周縁部の有力豪族がこの規格で古墳を営んでいる。吉備以西では唯一女狭穂塚がこの規格をもち、日向という僻遠の地でこのような大規格の古墳が営まれたのはやや異例に属す。

女狭穂塚は百舌鳥陵山古墳（5期）の1/2規模墳とする説（網干1985）もあるが、後円部径が72歩と1



62 歩、前方部長が 18 単位と 16 単位、前幅も 26 単位と 28 単位と相違してはこの説は到底成立しがたい。また、仲津山古墳（5 期）の相似墳との見方が成立しない点については既に指摘した（沼澤 2009）。ただし、仲津山の墳裾プランと近似するのはまちがいないので、女狭穂塚を集成編年 5 期に位置づけるのは太過はなからう。

集成編年の 5 期、5 世紀前半は墳丘規模が極大化に向かう端緒の時期である。女狭穂塚の径 72 歩という規格はたしかに大規格ではあるが、前方後円墳としては全国規模でみた場合の中小規格の範疇に属すから、西都原の政治勢力が倭王権に対して何らかの大きな貢献があつて、特に許された墳丘規格とする常識的判断で理解可能の範囲ではある。

女狭穂塚はくびれ部両側に造出をもつ。造出は本来、大王および王族の墳墓のために整備された追善祭祀の場であり、王陵区以外の前方後円墳で造出をもつ場合は、その子女が大王の妃となって皇子を産み、大王家の外舅として、葬祭に当たり大王、王族に準ずる礼遇を許された地方最高首長の墓と考えられる（VIII 章）。女狭穂塚の被葬者について具体名をあげた推論も知られ、最近では女狭穂塚を仁徳妃日向髪長媛、男狭穂塚をその父諸県君牛諸井の墓とする説（北郷 2005）が提示されている。文献的には仁徳以前の大王の存在は証明できないとする主張（川口 1981）も有力だが、一方で髪長媛の存在を一概に否定することはできず、5 世紀前半代に実際に大王の後妃に迎えられたとみる理解も知られる（井上 1974）。ただこの時代、地方から大王の妃に入った者が帰葬されるような習俗があつたのか証明はむずかしい。筆者の推論からすれば、後世、牛諸井として形象化されることになる当地の最高首長の方が、女狭穂塚の被葬者としてはふさわしい。

いずれにしても、記紀に記された婚姻伝承からみて、いつのころか、この地の最高首長一族と大王家とのあいだに婚姻関係が実際にあつたのはたしかであろう。女狭穂塚は前方後円墳であり、造出をもつので、その子女が大王家の妃となった者の墓と考えるのが至当である。いずれにしても 5 世紀前半代のこの地の最高首長の墓とみて問題はない。

##### 5) 男狭穂塚古墳の被葬者像

男狭穂塚古墳は、前方後円墳ではなく小方部墳であつた。小方部墳は、大王墳の陪塚として登場する事例から明らかなように、一義的には中央の伴造階層のために創出された墳形である。地方の小方部墳は、中央の伴造を介して倭王権と政治的関係を結ぶことになった新興の地方中小首長の墓と考えられる。また、葛城勢力の墓域内に乙女山古墳などの小方部墳が混在する例からみて、有力豪族の傍系一族の者も、王権に対する何らかの貢献があつた場合、特に小方部墳の築造を認められる場合があつた。小方部墳が登場し急速に地方でも築造されるようになる 4 世紀末から 5 世紀前半という時期からみて、朝鮮半島における軍事活動などで殊功のあつた者が、特に小方部墳の築造を認められた可能性が推察される（沼澤 2006）。

男狭穂塚の被葬者に同様の性格を当てはめて考えた場合、最高首長墳である女狭穂塚と相接して営まれ、主丘部規格はこれをはるかに上まわる事実をどのように理解したらよいのか。

小方部墳の主丘部規格は、奈良県池上古墳、三重県女良塚古墳などの径 54 歩（74.0m）がほぼ最大で、これより 4 ランクも大きい乙女山が既にして異例である。大王家に拮抗する力をもった葛城勢力の一族であり、さらに葛城襲津彦として形象化され古記に名をとどめるような著しい活躍があつて、はじめてこのような大規格が認められたと思われる。しかし、葛城勢力の墓域と目される馬見古墳群では、前方後円墳の巢山（4 期）、新木山、築山（ともに 5 期）の諸古墳は乙女山より 2～3 ランク大きい後円部規格をもち、他の多くの地域と同じように、小方部墳が同一墓域内の最高首長墳である前方後円墳の規格を上まわることはなかった。

ところが、男狭穂塚の主丘部規格は乙女山よりさらに3ランクも大きく、女狭穂塚より4ランクも大きい。男狭穂塚と女狭穂塚の墳丘規格の関係は、小方部墳、また造出をもつ前方後円墳の被葬者に関する筆者の理解によっては説明がつかない例外的な古墳といわなければならない。日向には小方部墳がきわめて少なく、逆に前方後円墳は前期には他地域にくらべかなり広範に築造されている。そのような中でなぜ小方部墳という墳形の古墳が、しかも破格の規模で築造されたのか。

集成編年で男狭穂塚は4期、女狭穂塚は5期に比定されるが、男狭穂塚の方が後出との見方も知られる（柳沢2003）。どちらも陵墓古墳のため判断材料に乏しく、その先後関係は今のところ不明とすべきであるが、ともに5期（5世紀前半）の互いにかかなり近い時期の築造とみて大過あるまい。ただし、男狭穂塚はあくまで小方部墳であるから、女狭穂塚の先代、あるいは次の代の首長の墓ではありえない点だけはたしかである。

男狭穂塚の被葬者の候補としては、何らかの倭王権のために絶大な功績のあった西都原の傍系首長の墓という見方が第一に考えられる。その活躍の年代は古墳の時期より若干さかのぼり4世紀末から5世紀前葉のころとみると、この時期の国家的大事業として、朝鮮半島への出兵と中国南朝への朝貢開始があげられる。男狭穂塚の被葬者がそのような大事業に関係し、多大の功績があった可能性は考えられないわけではない<sup>25)</sup>。それにしても、その墳丘規格はあまりに大きく、傍系首長の墓が最高首長墳に接して営まれるというのも不自然である。

次に、髪長媛を被葬者とする発想に近いものであるが、中央からの派遣将軍のような存在は考えられないであろうか。井上光貞は、髪長媛が実在した可能性は濃厚とした上で、「葛城のソツ彦は、熊襲の出身者で葛城に土着したものか、大和の葛城の出身者で熊襲の征定にも武勲を輝かしたものか」（井上1960）どちらかではないかと指摘した。景行天皇の九州巡幸説話では日向高屋宮は熊襲征討の基地のように描かれるが、上田正昭は、この説話はなんらかの素材があって宮廷旧辞として成立し、その背景には伴造も含んだ宮廷内の権力構造があったと推定している（上田1959）。実際に熊襲征討というような歴史的事実があったかどうかは別として、文献上日向と倭王権との密接な政治的関係は否定しがたく、様々な人的交流があったのもまた事実と思われる。熊襲あるいは北九州諸勢力に対するおさえ、戦略的拠点としての重要性から、中央から要人が派遣され、当地の最高首長の子女を娶って土着し、その地に埋葬されるような事例もありえないはなしではないと考える。

想像が過ぎるようであるが、小方部墳でありながら当地の最高首長墳である女狭穂塚と接し、これを圧倒する主丘部規模をもって営まれた男狭穂塚の被葬者として、このような者以外に適当な存在を考えにくい。小方部墳という墳形からみて、その人物は王族ではありえず、葛城、阿倍などの中央貴族の傍系一族か、有力な軍事的伴造出身者を充てるべきであろう。

いずれにしろ、男狭穂塚は大王墳に匹敵する大型の主丘部規格をもちながら、その墳形は格の劣る小方部墳であり、墳形と主丘部規格がつりあわない。なぜそのような墳形と規格で築造されたのか、そこには倭王権と日向の地域勢力との特定の政治関係が反映されている可能性があり、特別な事情があったのはまちがいない。そのような個別的特殊事情の推測は基本的に考古学の及ばぬ領域かもしれない、ここでは問題提起と私案の提示にとどめざるをえない。